

表紙, 目次, 抄録

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/37987 |

大正六年十二月一日發行

金澤醫學
專門學校

十全會雜誌

卷二十二第

號二十第

(號三十四百第)

金澤醫學專門學校十全會

金澤醫學專門學校 **十全會雜誌** 第二十二卷第十二號 (第四百十三號) **目次**

○原 著

○澤蟹類ヲ中間宿主トスル小吸蟲「カラバイヂストマ」(假稱)ニ就テ…… 醫學博士 中川幸庵……一

○原發性肺放線狀菌病ノ一例…… 醫學科第四學年生 伊達文次……七

○金澤市ニ於ケル痰壺内略痰ノ結核菌検査ニ就テ…… 醫學科第四學年生 島山正……二五

同 同 笹川竹藏……二五
同 同 的場清太郎

○纂 說

○恙蟲(毛蟲)病ニ關スル現今ノ智識…… 醫學科第三學年生 中澤弘恭……三

○學 會

○金澤皮膚科集談會第十九回例會…… 三

○第五回金澤外科集談會例會…… 完

○抄 録

内科學……三件
醫化學……四件
病理學……四件
細菌學……三件
外科學……七件
眼科及婦人科學……三件

○會 報

●雜誌部記事 ●第十八回講話部大會 ●第十二回庭球大會 ●釧道部南下隊……七

○叙任及辭令

●内閣 ●宮内省 ●東北帝國大學 ●石川縣……三

○人 事

●鈴木、島田兩博士……三

○會 告

●校外特別會員會費納付調書……六

○金澤皮膚科集談會第十九回例會 (大正六年十月十二日)

「エリトラスマ」ニ就テ

田 中 清 次

患者 北原某男、五十三歳、吳服商。

患者ハ淋疾ノ訴ヘニテ來院シ診察ノ際偶然「エリトラスマ」ヲ兩陰股部ニ發見シ土肥博士ノ臨床的診斷ヲ與ヘラレタルモノナリ本症ハ十四五年前ニ初メテ兩陰股部ニ小豆大ノ淡紅褐色ノ自覺症狀ナキ落屑疹トシテ發生シ極メテ徐々ニ蔓延シ初診當時ハ左右共ニ陰囊ニ觸接スル部ニ左ハ横徑八仙、縦徑十一仙、右ハ横徑五仙、縦徑六仙ノ淡紅褐色ノ班ヲ有シ周圍健康皮膚ヨリ明確ニ分界サレテ該班ノ周圍ニ接シテ存在スル米粒大乃至大豆大ノ同様ノ橢圓形班ト共ニ地圖狀ヲ呈シ該部ニ炎症々狀及ビ皮膚肥厚或ハ萎縮ヲ認メズ班面ニハ白色ノ薄キ粟粒大乃至半米粒大ノ剝離シ易キ落屑ヲ以テ被ハレ陰囊其他ニ斯ル皮疹ヲ認メズ一側ヨリ落屑ヲ「チエロイデン」剝離法ニヨリ採取シテ「メチーレン青」ニヨリ染色セルニ無數ノ「ミクロスポロン」、ミヌチッシュム」ヲ證明シ得タリ(標本供覽)。

更ラニ他側ヨリ刀刃ニヨリ採取セル落屑ヲ刀刃ニテ粉末狀トナシ二十六歳女ノ左肘窩部ノ皮膚ニ塗擦接種セルニ一ヶ月ヲ經タル後モ六週ヲ經タル後モ Kôder 氏等ノ記載セルガ如キ陽性ノ成績ヲ得能ハザリキ尙ホ該落屑粉末ヲ Michelo 氏ノ爲シタルガ如キ普通培養基及ビ尿寒天培養基、尿膠質寒天培養基、膠質寒天培養基ニ室温ニテ平板培養セルニ二週後ニ尿膠質寒天培養基ニ白色ノ表面凹凸不平邊緣不正厚層ノ聚落ヲ得、鏡下所見甚ダシク「ミクロスポロン」、ミ

ヌチツシムムニ似タルニヨリ此ヲ前記二十六歳女ノ肘窩ニ接種セルモ遂ニ陰性ニ終レリ、患者ハ僅ニ二三日ノ滞在ニテ急ギ北海道ニ歸リ爲メニ試験ヲ反復シ得ザリシハ大ニ遺憾トスル所ナリ。

以上ノ如ク試験ハ總テ陰性ニ終リ興味少キモ稀有ノ皮膚疾患ノ一例トシテ報告シ併セテ珍ラシク多數ノ菌ヲ有セル落屑標本ヲ供覽シタル次第ナリ。

護謨腫癩痕ヨリ發生セル表皮癌

森 田 隼 三

竹内某男、六十四歳、料理業、初診大正六年八月、金澤病院皮膚科外來。

既往症。生來強健ニシテ著患無ク二十歳前後ニ兩側ブーボ切開ヲナシタルコトアルモ當時陰莖ニ傷ヲ有セシヤ否ヤ不明ナリ後數年ニシテ左大腿外側及右大腿外側ニ潰瘍ヲ生ジ一方ニ治シ他方ニ増惡シ爾來今日迄殆ド三十年間出沒シテ根治セシコトナシ左側大腿部ノ弓ハ昨年末頃治癒ニ趣キシモ右側ノモノハ治セズ且ツ本年四月頃ヨリ俄然増惡ノ度ヲ高メ從來ナキ速度ヲ以テ潰亂シ且ツ膨隆シ來ル依テ六月某醫ニ依リ其一部分ノ切除ヲ受ケタルコトアリ然ルニ治癒ニ趣カズシテ平坦ナル肉芽ノ一部ヨリ再ビ雲狀ニ膨隆増大シ來レリト。

妻ハ六十歳ニシテ健存シ數年前ヨリ頸部ニ手掌大ノ腫瘤ヲ有スル他著患ナシト學子一人アリ五、六年前肺疾患ニテ倒ル流産早産ナシ。

現症。体格強大榮養不良皮下脂肪ニ乏シ皮膚蒼白乾燥シ弛緩セリ時々咳嗽咯痰アルモ胸部ニ聽診上異常ヲ認メズ左右大腿外側全部ニ亘リ地圖狀或ハ嶋岐狀ノ癩痕數個ヲ有シ左側ノモノハ尙痂皮ヲ被ムリ暗褐色ヲ呈ス、兩側ブーボ切開ノ外腺ノ腫脹及癌轉移等異狀ヲ認メズ。

右側潰瘍ハ上下ニ長ク五五仙米ヲ算シ巾三五仙米アリ桑實狀ニ著シク隆起シ質脆弱ニシテ諸所ニ出血或ハ黃白色汚

穢ナル分泌物ヲ附シ惡臭アリ。

右病況及現症ヲ相合スルニ癩痕ハ正シク護謨腫後ノモノニシテ腫瘤ニ癌腫ナリ。

八月十七日入院同二十七日腰椎麻痺ニテ手術ヲナス、其ノ一部ヲトリ「アルコホル」固化「バラフキン」固定普通染色法ニヨリ組織標本ヲ見シニ上皮細胞ノ増殖甚シク索狀ヲナシ其著シキ部分ニハ眞珠球ヲ呈シ殊ニ有棘細胞ノ數層ハ之ヲ明瞭ニ認ムルコトヲ得。

即チ成書記載ノ如ク癩痕ヨリ來ル表皮癌ハ基底細胞癌ヨリモ有棘細胞癌ヲ多シトシ主トシテ陳舊ナル癩痕ヨリ來リ且ツ刺戟ヲ必要トシ又淋巴腺ヲ侵スコト少キ等本例ト一致スル處ナリ其癌發生ニ就キテハリベルト氏ハ癩痕形成ノ際上皮細胞ノ一部天然の連續ヨリ離斷セラレテ結締織中ニ包囊セラレ茲ニ始メテ癌發生ノ基源ヲ開クモノナリト説明セリ。(寫眞及標本供覽)

微毒性手掌足蹠乾癬ノ一例

關 川 敬 治

患者 水越某男、二十歳、刀劍磨工師。

患者ハ幼時ヨリ健全ナリシガ昨年四月陰莖ニ何等ノ創傷ヲ自覺セズシテ左側有痛性ノ橫痃ヲ生ジ二ヶ月餘ニシテ治癒セリト本年四月上旬不潔ナル交接後一ヶ月餘ニシテ冠狀溝ニ硬性下疳ヲ生ジ同時ニ兩側鼠蹠腺ノ無痛性腫脹ヲ來タシ次デ八月上旬頃ヨリ頭重熱發關節痛排便時疼痛鼻腔内ノ乾燥口内ノ熱感疼痛粘膜炎剝脫頭髮脫落ヲ感知スルニ至レリ次デ九月二日頃ヨリ兩側ノ手掌及足蹠ニ疼痛及癢痒ナキ發疹ヲ發生セリ患者ハ定型的ノ微毒性禿髮粘膜炎咽頭炎陰囊及陰囊ノ丘疹、肛圍扁平「コンデローム」ヲ有スル外手掌ニハ極メテ著明ノ微毒性乾癬ヲ認メタリ即チ手掌ハ對側性ニ諸所ニ銅紅色ヲ呈シタル表皮ノ剝脫面ヲ認メ其周縁ニハ鱗屑ヲ被リ剝脫面ヲ觸知スルニ健皮ヨリハ稍々隆起シ硬固ノ

浸潤アリ鱗屑ヲ剝離スルニ容易ニシテ出血ヲ認メズ足蹠ハ手掌ニ比スレバ其犯サレタル部位モ少ク中央部ニ二三ノ小豆大ノ角化性上皮ノ剝離ト硬固ノ浸潤アルノミ。

手掌足蹠乾癬發生ニ付テハ成書ニ農夫等ニシテ平常堅キ道具ヲ握リテ仕事スル人ノ手掌ニ能ク發生ストアリ此一例モ刀劔磨工ニテ常ニ堅キモノヲ握リテ仕事スルタメニ刺戟ガ發疹ヲ誘起シテ發生セシモノナラン。

顔面播種狀粟粒樣狼瘡ノ症例追加

土 肥 章 司

予ハ大正四年五月皮膚科雜誌ニ本症ノ一例ヲ報告セシガ次デ京大皮膚科ノ柳原學士ヨリ一例及東大皮膚科ノ笹川學士ヨリ三例合計五例ノ報告アリタリ然ルニ最近予ハ又本症ノ著明ナル一例ヲ實驗セルヲ以テ左ニ報告スベシ。

山口某男、三十二歳、農、大正六年七月初診。

患者十歳ノ時父ハ腦溢血ニテ母ハ肋膜炎ニテ死亡シ同胞五名内一名ハ精神病ニテ死亡シ他ハ健康患者ハ本年二月結婚シ妻ハ健全ナリ。

患者生來強健ナラザルモ著患ナク結核或ハ花柳病ニ罹リタルコト無シト云フ本年四月中旬頃左右下眼瞼ニ赤色腫脹ヲ來タシ僅ニ緊張感アルノ外癢痒疼痛等ヲ覺エズ然ルニ六月七日理髮シ始メテ鼻背部及其周圍ニ數個ノ赤色發疹アルヲ認メ其後二乃三週間中ニ著シク其數ヲ増加セリ自覺的障礙毫モ無シ。

現症。体格營養中等食慾佳良便通一日一行尿中蛋白糠分ナシ左肺ハ正常ナルモ右肺尖ハ打診上短ク呼氣僅ニ延長セルヲ覺ユル外内臟骨淋巴腺等ニ異常ヲ認メズ。

發疹ハ全ク顔面ニ限局シ眉毛部上下眼瞼鼻根鼻唇溝頰上唇等ニハ密ニ其他ノ顔面諸部ニハ粗ニ存在シ殆左右相對的ニ排列セリ僅ニ二三發疹ノ融合セルモノアルモ其他ハ總テ孤立性ニ存シ大サハ多クハ半米粒大ナルモ小ナルハ粟粒大ヨ

リ大ナルハ小豌豆大ノモノアリ表面ハ扁平滑澤ニシテ皮膚面ヨリ少シク隆起ス或ハ全ク皮膚組織中ニ埋没スルモノアリ色ハ鮮紅色赤褐色或ハ黃褐色ヲ呈シ半透明ノモノアリ少數ノ發疹ニアリテハ頂點ニ黃色膿樣物或ハ出血部（顔面洗滌ニ際シテ強ク摩擦シ爲メニ出血セリト云フ）ヲ透見シ得ルモノアリ又四五ノ少シク陷凹セル小癩痕ヲ認ム口腔口唇及鼻粘膜眼結膜等ニハ發疹ヲ認メズ。

右頰部ヨリ稍々半球狀ニ隆起セル小結節ヲ切除シ連續切片標本ヲ造リ染色鏡檢スルニ病竈部ハ真皮組織中ニ存シ定型的ノ結核性病變ヲ呈シ中央ハ既ニ少シク乾酪樣壞死ニ陥リ其周圍ニハ多數ノ上皮樣細胞二三ノラングハンス氏巨細胞アリ最モ外層ハ單核圓形細胞浸潤アリ連續切片ノ少數ノ標本ニ於テハ病竈部ガ直接表皮層ニ連接スルモノアルモ他ノ多クノ標本ニ於テハ病竈部ト上皮層トノ間ニハ變化ナキ結締組織層存在セリ竈中ノ彈力纖維ハ殆消滅シ毛囊皮脂腺汗腺等トハ密接ノ關係ヲ認メズ結核菌染色ハ總テ陰性ニ終レリ。

本症例ノ發生機轉ニ對スル所見ハ予ガ前回報告セル第一例ニ於ケルト全ク一致ス。（患者寫眞及標本供覽）

○第五回金澤外科集談會例會（大正六年十二月十二日）

婦人膀胱ニ發生シタル尿酸碳酸石灰結石ノ一例

七 五 三 龜 吉

演題ニハ尿酸碳酸石灰結石ト掲ゲシモ「チスチン」ノ少量ヲ含有シタルモノナリシ、又膀胱結石ノ婦人ニ發生スルハトムソン氏ノ統計ニヨルモ總數八三七例中、婦人及小兒ハ僅三〇例ヲ見ルガ如キ少數ニシテ就中「チスチン」ヨリナルモノハ極メテ稀ナリ。

患者、江沼郡上原村ノ農婦、四十六歲、血族關係トシテハ、父七十五歲健康、母ハ五十歲腦病ニテ病死、兄妹三人皆

健康配偶者ハ六年前腹部膨滿ヲ來シ後四年ニシテ死亡セリ、生來患者健康ニシテ淋疾等花柳病ノ感染ヲ知ラズト、本年四月十日頃ヨリ尿數瀕回トナリ、同月下旬ニ於テ一週日間少許ノ血尿ヲ持續シタリ、五月頃ヨリ從來感セシコトナキ疼痛ヲ排尿後ニ來シ且ツ排尿瀕數漸次加ハリ殆ド尿淋漓ノ狀ヲ呈スルニ至リシモ、排尿障礙未ダナシ、初診當時ハ單ニ膀胱加答兒ト診斷シ置キタルニ其ノ後來院セズ、本年八月廿六日再來訴フル所ニヨレバ他醫ニヨリ膀胱結石ト診定セラレタルヲ以テ手術ヲ乞フト、依テ同八月廿八日、全身麻醉ノ下ニ漸次尿道ヲ擴張シテ、之レヲ摘出ス、結石ハ



ノ如キ曲玉狀ヲナシ、長徑三〇糎、短徑二・五糎、重量四・五瓦アリ、表面稍粗糙、淡褐黃色、斷面、淡黃帶赤色ニシテ薄キ皮殼ヲ形成シ其ノ質脆弱ナリ、而シテ結石ノ凸隆面ハ膀胱ノ右側粘膜面ニ接着シアリシモノニシテ其ノ部ノ粘膜面ハ皺襞著大殆ド「ポリープ」狀トナリシモノアリテ其ノ皺襞間ニ尙ホ幾多ノ砂狀結石ヲ存在セリ、膀胱洗滌ヲ行ヒ是等ノ結石ヲ悉ク、除去シ術ヲ了レリ、尙摘出セシ結石ニ就キ化學的試驗ヲ行ヒタルニ尿酸ノ反應ヲ呈シ、炭酸石灰及「チヌチン」ヲ證明シ、大凡尿酸三分二、炭酸石灰三分一、「チヌチン」少量ヨリ形成セラレタルモノナルヲ知ラレタリ、此ノ發生ニ關シテハ嘗テシユツテル氏ガ膀胱直腸間ニ二百二十一個ノ小結石ヲ生ジ之レガ小孔ニヨリ膀胱内ニ通ジタル一奇例ヲ實驗シ、手術ヲ施シタルニ其ノ内面ハ膀胱ト同様ノ粘膜ヲ以テ被ハレアリ、蓋シ結石存在部ハ膀胱ノ一部擴大シテ小孔ニヨリ互ニ連通シアリシモノナラント云フ、本例ノ如キモ結石接着部ノ粘膜ニ多數ノ「ポリープ」様皺襞ト砂狀ノ結石アリシトハ同氏ノ奇例ニ一致スルモノニアラザルカ、土地ノ關係ハ獨國ニテハ高地ノモノニ多ク、英國ニテハ關係ナシト云フモ、本患者ハ山地ニ住居シ、殊ニ植物性食餌ヲ多ク攝リ肉食ハ殆ドナサザルノ狀ニアルヲ以テ、多少之レガ發生ヲ誘起セシモノナラン、其他膀胱結石ハ炎症ノ結果發生スルモ本例ハ之レニ基ク燐酸安母尼亞鹽結石ナラズシテ尿酸鹽結石ニテアリシ、又腫瘍、房事及手淫過度ノ原因スルコトアルガ如キモ、本例ハ然ラズ、要スルニ本例ノ結石發生ハ膀胱ノ一凹陷部ニ尿ノ滯溜ヲ來セシニ基因セシナランカ。

討論、飯森益太郎。寫真及結石供覽(次圖寫真像ノ如シ)

余ハ今春本會例会ニ於テ四歲四ヶ月ノ一男兒ノ膀胱結石「レントゲン像ヲ供覽セシコトアリシガ本月六日上膀胱截開ニ依テ摘出セシニ表面粗糙、帶褐黃色、扁圓形ヲ呈シ重量一〇・〇六、長徑三・二、横徑二・八、厚徑一・七ヲ有スル



チニ高位膀胱截開ヲ加ヘ磷酸安母尼亞結石ヲ摘出ス、又小兒ノ一例トシテハ年齡十三歳ノモノ生後未ダ一回モ尿利快通セズ、右側下腹部ニ丸キ膨隆部ヲ生ゼリト、之レヲ切開シテ大ナル結石ヲ摘出ス、爾後尿通苦悶ナシト。

止血帶貼用ニ因セル四肢壞疽ノ二例

田 中 一 次 郎

第一例。 横濱市長島町、鑛山業、中村秀造、五十四歳。

大正六年十月二十四日、初診、昨二十三日午後一時頃、本縣下、白山々麓ニテ手取川上流ヲ跋涉中、大ナル川石、約千貫以上ノ上ニ左足ヲ踏ヘタルニ其ノ石ガ滑轉シタル爲メ、水流中ニ轉ジテ、兩下肢ヲ其ノ石ト他ノ大ナル石トノ間ニ挟ミ、殆ド三時間ヲ費シテ漸ク其ノ石ヲ除去シ得タルニ、右足背部ハ一汎ニ腫脹ヲ呈シ、左下腿部ニ大ナル挫創ヲ生ジタルヲ以テ直チニ附近某醫ノ下ニ應急處置トシテ左下腿部ニ繃帶ヲ施シ、左大腿下部ニ細キ紐ニテ止血帶ヲ貼ゼラレ、本院マデ約十數里間擔架運搬途中尙出血著シク、更ニ左大腿部ニ於テ中央部ニ一回次デ大腿上部ニ一回、止血繃帶ヲ貼ジ漸ク來院シタルハ翌二十四日午後二時過頃ナリシ。

顔面著シキ蒼白色ヲ呈シ激烈ナル口渴ヲ訴フ、脈搏微弱ニシテ其ノ數百至アリ、不敢取「デギタミン」及「カンフル」注射ヲ行ヒ鹽里母赤酒、食鹽水ノ鎖用ヲ與フ、左下肢ヲ檢スルニ、大腿下部ハ木綿手拭ニテ、二重ニ強ク緊縛シ、大腿中部及大腿上部ハ瓦斯織兵古帶ヲ以テ各幾重ニモ強ク纏絡シ殊ニ大腿上部ハ其ノ壓迫ヲ強メンガ爲メ股動脈部ニ長サ三寸許ノ細長ナル木片ヲ嵌入シアリタリ、先ヅ下腿部ノ繃帶ヲ撤去セシニ下腿前面ノ中央部ヨリ斜メニ外下方ニ走リ外踝部ニ達シタル一條ノ長サ約二〇〇仙迷挫創アリ其ノ創内ニ於テ腓骨下三分一部ノ骨折アルヲ認ム、尙ホ左下肢ハ大腿上部緊縛部以下著シク腫脹「チアノーゼ」ヲ呈シ全ク缺冷ス、次デ大腿部三ヶ所ノ緊縛ヲ解除セシニ左下肢ノ強度ナル疼痛ヲ訴フルモ創傷内新ナル出血ナク、且ツ「チアノーゼ」血冷等ハ消退セズ、由テ腓骨々折部ヲ整復シ創ハ一部分縫合ヲ加ヘ、尙ホ外踝ノ後方ニ微ニ小對孔ヲ穿テ切斷シ更ニ之レヲ決行スル事トナシテ病室ニ送リタリ、爾後患者ハ虛脱ノ狀ヲ來シ午後五時頃終ニ死亡セリ。

第二例。 飛驒、大野郡百川村、農業、中村直之助、四十四歲。

大正六年十月三十日初診、本年十月二十五日午前十一時頃飛驒白川上流ノ山中ニテ「ツル」(三尺許ノ木柄ニ一尺許ノ金嘴)ヲ用ヒ長サ二間許ノ丸太材木ヲ谿谷ニ落シアリシ際、誤テ二三間許ノ斷崖ニ墜落シ右上膊ヲ上ヨリ轉落シ來リタル丸太材木ト地上ノ石トノ間ニ挟ミ負傷シタリ、當時失神等ナク起立セシモ右上肢ハ全ク無力トナリ出血アリシニ

ヨリ、直チニ禪布ヲ以テ、救急繃帶ヲ施シ尙ホ強ク上膊ノ上部ヲ緊縛シタル儘翌二十六日夕、越中城端町ニ達シ其ノ翌朝二十七日越中牧野村ノ整骨師ノ療ヲ乞ヒタルニ同所ニテ救急繃帶並ニ上肢ノ緊縛ヲ除カレタリ、後單ニ上膊ニハ輕ク繃帶セラレ毎日一回宛交換セラレタルモ、輕快セズ依テ本院ノ治ヲ受クベク、十月三十日午後七時頃來院セリト。躰格中等、皮膚黃白、惡臭甚ダシ脈搏疾速ナルモ緊張ス、上膊部ノ繃帶ヲ除キ檢スルニ、右上肢ハ殆ド全部、汚穢紫藍色ニ變色腫脹シ處々大小ノ水泡ヲ多發シ、上膊中央部ニ骨折アルヲ認メ二頭膊筋々腹部ニ小サキ創傷アリテ出血ス試ミニ水泡ヲ破レバ惡臭ヲ帶ビタル腐敗液ヲ漏出シ、躰温四十度一分アリ、到底右上肢ノ保存ハ望ミナク且ツ敗血症ノ症狀ヲ有スルヲ以テ十一月二日右肩胛關節ニ於テ式ニ基キ關節離斷術ヲ決行セリ、爾後經過佳良ナリ。

一千八百七十三年、エスマルヒ氏ガ驅血法ヲ創案セラレタル以來四肢ノ手術ハ殆ド失血ヲ見ズシテ施行セラレ其ノ思想實ニ甚大ナリト云フ可シ、加フルニ現今之レヲ四肢ノ外傷ノ際止血法ノ救急處置トシテ汎ク應用スルニ至リタリ、蓋シ往々其ノ使用ヲ誤リ、二時間—三時間以上ノ持續ハ決シテナス可ラズト云フ訓戒ヲ守ラザルガ爲メ四肢ノ壞疽ヲ見ルノ不幸ヲ來スコトアリ、即チ第一例ハ殆ド二十四時間大腿ヲ緊縛シタル爲メニ左下肢ヲ壞疽ニ陥ラシメ第二例ハ約二晝夜上膊ニ止血帶ヲ貼シタルニヨリ右上肢ノ壞疽ヲ招キタルモノトス右肩胛關節離斷ニ由リ幸ニ佳良ノ經過ヲ見ルニ至リタリ。

討論、飯森益太郎。川原某男、三十四歳、能美郡新丸村字小原、農及稼、大正五年十一月八日午前八時五六十貫許リノ大轆ノ棒左下脚ニ倒レ其際脛腓兩骨ノ著シキ轉位セル複雑骨折ヲ來シ出血多量ナリシヲ以テ手拭ニテ大腿ヲ緊縛シ運搬中尙ホ少量宛出血セシヲ以テ更ニ禪帶シテ強ク纏絡シ來院セリ此間約七時間許經過セリ、下腿藍紫色厥冷シ結紮ヲ除去セシモ出血ナク到底壞疽ヲ免レズト思慮セシモ幸ニシテ一二日ノ後漸々快復セリ之レ恐ラクハ尙一部少量ノ血行ノ現存セシモノナラン如斯場合ハ切斷術ヲ急ガザルヲ可トス。

山田孝太郎。止血帶ノ症例ナラザルモ四肢壞疽ノ一例ヲ實驗セリ、十歳ノ小兒、右手丹毒症ニ氷嚢ヲ貼ジ全

ク壞疽ニ陥リタリト。

七五三龜吉。明治四十年ノ頃、年齡廿四五歳ノ農夫、松任、鶴來間ノ街道ニテ蝮ノ咬傷ヲ趾ニ受ケ、其ノ大腿上部ヲ強ク緊縛シタル儘、粟津温泉ニ入浴一週日間ニ病院ニ來レリ、該下肢ハ全ク壞疽ニ陥リタリ。

鼠咬症 第四例

飯 森 益 太 郎

鼠咬症病原「スピロヘータ」發見以來余ハ三名ノ同患者ヲ實驗シ已ニ報告スル處アリシガ今又第四例ニ遭遇セシヲ以テ左ニ其病歴ヲ述ベントス。

患者 涌波某女、三十七歳、本市賢坂辻ノ住人、生菓商家族。

本年八月八日午前二時頃家猫、鼠ヲ捕ヘ蚊帳ノ中ヘ入リシヲ以テ之レヲ逐出サントセシ際、鼠飛ビ來リテ右第四趾ヲ咬傷シ、二三滴ノ出血アリシモ自然ニ治セリ、同十三日右脚腫起疼痛アリ某醫ノ診斷ヲ受ケ十八日ニ咬傷部ヲ切開セリ、同二十日俄然發熱四十度ヲ越エ二日許リ持長、一時輕快セシモ時々八度内外ノ熱發反復シ、九月四日ニ至リ惡寒戰慄ヲ以テ熱上昇四十度三分ニ達シ、之レト同時ニ右下脚水脈炎ヲ來シ二日後ニ至リ左前膊、右手背、左右眼瞼ノ上下ニ紅班ヲ散發セリ、此症狀ハ四日許リニシテ消退セシモ其後ハ不定時ニ發熱シ身体ハ漸次衰弱シ食減、倦怠、頭痛ヲ訴フ、紅班ハ時々一二個宛發現スルモ初メノ如ク甚シカラズト云フ、九月四日午前十時初診、体温三十八度三分、脈搏百至、體重二三、二八〇匁、尿中蛋白ナシ、同日午後三時「ネオエラミソール」〇・六ノ濃厚注射ヲ施ス、夕刻体温四十度七分、午後十時九度四分ニ降り、翌朝三十六度八分、夕刻三十七度四分アリシガ漸次下降、第四日目ヨリ平温トナリ同時ニ諸症輕快シ在院十二日間ニシテ全治退院セリ。

右患者ハ注射前ニ採血シ枸橼酸ナトリウムヲ混ジ直チニ金澤醫學專門學校細菌學教室ニ送り病原菌ノ鏡見及動物試

驗ヲ煩ハセシモ其成績ハ陰性ナリキ。

余ハ前ノ三例ニ於テモ其都度血液、局部切片、腫脹水脈腺穿刺液、塗抹「ブレバライト」、及ビ血液ヲ「モルモット」ニ注射セシモノヲ贈リ検査ヲ乞ヒシモ一回ダニ菌ヲ發見セシコトナキハ遺憾ナリ會員諸君ノ中ニ實驗アラバ承リタシ。討論 田中一次郎。 去ル十月廿八日新潟市ニ開催ノ北陸醫學會ニ報告シタル猫咬症ノ一例ヲ本月七日金澤醫學專士全

會講話大會ニ講演ノ際、同校兒玉教授ハ演者ヨリ送ラレタル、第一例―第四例ノ各患者ノ血液並ニ余ノ送リタル猫咬症患者ノ血液ニハ何レモ「スピロヘータ」ヲ證明セズ、之レ或ハ検査ノ方法及ビ採血ノ手段ノ適當ナラザルニ因ルモノナルカ、兎ニ角患者ノ血液中「スピロヘータ」ヲ證明セザルコトモ或一成績ニアラザルカノ討論アリタリ。

山田孝太郎。 十二歳ノ男兒、本年八月廿六日舛落ニテ捕獲セラレタル鼠ノ爲ニ左環指ヲ咬傷セラレ九月四日頃ニ至リ該咬傷部疼痛、熱發アリ數日持續ノ後消退シ九月十八日再ビ熱發アリ翌十九日來診ス、左上肢ニハ明カニ水脈管炎ヲ呈シ、且ツ肘關節ハ腫脹シテ運動甚ダ困難ニアリ、同月廿日〇・二五「アルサミノール」ヲ上肢靜脈内注射ヲ行フ嘔吐三回アリシガ、症狀漸次輕快セリ、而ルニ注射上肢ニ同月廿三日ニ至リ著シキ皮膚紅斑ヲ發生セリ。

獵銃彈(鉛彈)ニ因ル膝關節盲管銃創ノ一例

高 桑 勇 次 郎

銃創ハ平時ニ於テ見ルコト極メテ少ナク、殊ニ近來鉛彈ニ因ル銃創ハ甚ダ稀有ナリ、然ルニ最近親シク一實驗ニ遭遇セシヲ以テ之ヲ報告セン。

本例ヲ舉グル前ニ關節銃創ノ一汎ニ就テ概略ヲ述ベンニ、我が陸軍戰後衛生史ニヨレバ、銃創患者總數ニ對スル關節銃創ハ、日露役ニ於テハ約六・四%日獨役ニ於テハ六・二%ノ比例ヲ示シ、各關節受傷ノ比例ハ膝關節尤モ多ク、即チ日露役ニ於テハ關節銃創總數ニ對シ膝關節ノ銃創約三三・八%、日獨役ニ於テハ四六・一%、亞デ肘、肩胛、足、腕、關節ノ

順序ナリ。

銃創ノ骨ニ對スル破壊作用ハ骨辨ニ於テ著シク、骨端即チ關節周邊ニ於テハ質脆弱ナル爲メ破壊作用比較的輕シ、勿論彈丸ニ由テ其作用ヲ異ニシ、尖彈ノ如キハ侵徹力強キヲ以テ破壊作用少ナク、鉛彈ノ如キハ之ニ反シ作用強大ニシテ骨折ヲ伴フコト多シ、又極メテ稀ナルモ關節銃創ニ由テ脱臼ヲ來タスコトアリ、其ノ數甚ダ少ナク日露役ニ於テ僅カニ一例實驗サレ、又グルト氏ノ記載ニ由レバ五例ヲ示シ、而モ每常肩胛關節大多數ヲ占ムト。

關節ノ銃創ニ於テハ大多數關節囊ノ損傷ヲ伴フモ、少數ニ於テハ單ニ關節囊ノミ受傷シ、關節其ノ者ニ何等ノ異常ナキコトアリ、其ノ數約四乃至六%ニ該當シ、而モ肘關節又ハ膝關節ノ如キ蝶番關節腔ノ大ナルモノニ於テ關節囊ノミノ損傷ヲ見ル、又シモン氏ノ研究ニ曰ク、膝關節屈曲百五十度ノ際ハ、關節前面ヨリ銃創ヲ受クルモ多クハ關節ニ變化ナク、關節囊ノミ損傷サレ、屈曲百六十五度ノ位置ニ於テハ、膝關節ノ側面ヨリ銃創ヲ受クルモ、前ト同様ノ結果ナリト。

關節銃創ノ診斷ハ軟部被覆組織大ナラザル關節、例ヘバ肘關節膝關節ノ如キハ比較的容易ナルモ、時トシテ困難ナルコトアリ、勿論「レントゲン」裝置ヲ有スル場所ニ於テハ何等ノ困難ヲ感ゼラルモ、該裝置ハ隨時隨所ニ得ベキモノニアラズ、從テ多クノ場合ハ以下述ブル臨床的所見ノ、綜合的診斷ニ據ラザルベカラズ。

一、軟部創口即チ射入出口ノ位置ニ由テ考察スベシ、然レドモ軟部創口ハ關節ノ屈伸ニ由テ位置ヲ變換スルヲ以テ、此際充分注意ノ下ニ受傷當時ノ位置ヲ考察シ、以テ診斷ノ一助トナスヲ要ス。

二、疼痛ハ受傷當時多クノ場合著シカラズ、或ハ全ク缺如スルコトアリ、又關節ヨリ遠隔セル部ニ於テ却テ疼痛ヲ訴フルコトアリ。

三、關節官能障礙モ直チニ發スルモノニアラズ、特ニ尖彈ニ由ル關節貫通創乃至留彈ノ際ニ於テモ、患肢ノ運動ニ大ナル苦惱ナクシテ、十キロ内外ヲ步行セシ例アリ。

四、滑液流出ハ診斷上重要ナリ、サレド滑液タルヤ少量ノモノニシテ、膝關節ノ如キ多量ヲ有スルモノニ於テモ十瓦内外ニ過ギズ、而モ其ノ流出ハ受傷直後ニ發スルモノニシテ、稍々時ヲ經レハ軟部創管ノ移動等ニ由リ流出スルコト殆ンドナシ、故ニ滑液ノ流出ハ常ニ期待シ得ベキ症狀ニアラズ、日露役ニ於テモ膝關節銃創三百三十七例中、滑液流出ヲ見シハ十二例ニ過ギズト。

五、關節ノ腫脹モ診斷上價値アリ、サレド時トシテ腫脹輕易或ハ全ク缺如スルコトアリ、但シ腫脹ノ迅速漸進性ノモノハ重キ關節損傷ヲ確診セシム。

六、血腫ノ高度ナルモノハ無論骨損傷ヲ意味ス、血腫ハ色澤ノミナラズ觸診ニ由テ特異ノ握雪音ヲ呈ス、又大ナル血管ノ損傷ヲ伴フ際ハ屢搏動性關節血腫ヲ形成ス。

要スルニ滑液ノ流出、腫脹、血腫、變形、患肢短縮、軟部創管ノ位置等ニ由リ綜合的診斷ヲ下サザルベカラズ。關節銃創ノ經過ヲ概論スルニ、昔時創傷療法ノ幼稚ナリシ時代ハ頗ル危險視サレシモ、近時防腐法ノ發達創傷療法ノ進歩ト共ニ、其ノ經過漸次良好トナレリ、然レドモ若シ關節内ニ染毒セバ彼ノ胸腹腔ニ於ケルガ如ク、關節内ノ液体ニ由テ一齊的即チ爆發性ニ蔓延傳播シ、生命上ノ危險ヲ醸スコトナシトセズ、幸ニモ關節銃創ノ際ニ於テ其多數ハ、創口狹小且被包スル軟部ハ大ナル移動性アルヲ以テ、創管直チニ閉鎖スルコト多キヲ以テ、外來ノ傳染ヲ防グ場合多數ナリ、從テ化膿ニ陥ル場合モ多カラズ、日露役ニ於テ化膿ニ陥リシモノ三十一%、日獨役ニ於テ約三十九%ナリト。無毒性經過ヲ取ルモノニ於テハ、大多數著シキ官能障礙ヲ貽サズシテ治癒シ、時トシテ關節滲出液吸取後單ニ纖維素ノ沈着、又ハ軟骨面ノ結締組織増殖等ニ由リ、一時性關節官能障礙ヲ見ルコトアルモ、多クハ後ニ至リ官能恢復ヲ得ルモノナリ。

關節ノ破壞作用大ニシテ化膿ヲ繼發スルモノニ於テハ、關節ノ強剛、骨端ノ壞死、癱關節ヲ招來シ、甚ダシキニ於テハ關節ノ崩壞症乃至敗血、膿毒症ヲ來タス。

豫後ハ經過ノ部ニ於テ述ベシ如ク漸次良好トナリ、生命上ノ豫後ハ、獨佛戰役時ニ於テハ三五・九%ノ死亡率ヲ見シガ、日清役ニハ八・二%、日露役ニ於テハ二・三%ノ數ニ過ギズ、而シテ生命上ノ危險ヲ來タスモノハ、出血、シヨック、創傷傳染病(就中テタヌス)、等ニアリトス、尙ホ豫後ト關節部位ハ一定ノ關係ヲ有スルモノニシテ、從來ノ各戰役ニ於テ關節ノ銃創ハ豫後不良ノコト多ク、亞テ膝關節、肩胛關節、足關節、肘關節等ノ順序ナリ、之ヲ一括スレバ下肢關節銃創ハ上肢ニ比シ約五倍ノ死亡率ヲ有ス。

關節切離乃至離斷ノ豫後モ漸次良況ナリ、獨佛戰役當時ニアリテハ、切斷等ヲ要セシモノ關節創總數ニ對シ二一・六%内外ナリシガ、日露役ニ於テハ四・七%、日獨役ニアリテハ六・二%内外ニ過ギズ。

銃創治癒後官能障礙ニ對スル豫後ハ、前二者ニ等シク漸次良況ヲ呈シ、日清役ニ於テハ何等ノ障礙ナク完全ニ治癒セシモノ一六・七%ニ過ギザリシガ、日露役ニアリテハ五一・九%、日獨役ニ於テハ六〇・〇%ノ良果ヲ呈セリ。

治療法ノ主眼ハ、絶對的防腐法ノ下ニ保存療法ヲ企ツルニアリ、昔時ハ關節銃創ニ對シ屢々第一期切斷術ヲ施コセシモ、外科ノ發達傷者運搬法ノ改善彈丸ノ改良等ニ由リ、大ニ保存療法ノ範圍ヲ擴大シ、切斷等ヲ施コス場合減少セルハ喜バシキ現象ナリ。

軟部創口ノ狭小ニシテ骨ノ犯サルコト少ナキ場合ニハ、骨端部ヲ不動安保シ防腐繃帶ニ由テ殆ンド奏効ス、但シ關節ノ挫滅甚ダシキモノ、主要血管ノ損傷ヲ伴ヒ止血困難ナルモノ、留彈存在シ障礙アルモノ、關節内ニ染毒シ炎症蔓延ノモノ、創傷傳染病ヲ繼發スルモノ、化膿ニ後出血ヲ兼ヌルモノ、全身衰弱ニ陷ルモノ、患肢ノ壞疽ニ陷レルモノ等ニ於テハ、手術ヲ決行スベキモノトス。

症 例

福井縣大野町産、時計商、三十四歲、坂森某、

大正六年十一月一日午後七時頃家族ト談笑中突然銃創ヲ受ク、(一軒隔テタル家ニ獵師アリ該獵師誤テ發射セシモノニ

シテ射距離約四間餘其ノ中間ニハ三寸餘ノ壁及四分板一枚ヲ貫流シテ來レルモノナリ)當時坐位ニアリシガ右膝關節ノ上外側ニ射入口ヲ生ジ、受傷瞬間精神朦朧タリシガ爾後右膝關節運動ニ際シ疼痛アリ、一二日ヲ經テ關節ノ腫脹ヲ來タシ屈伸障礙ヲ招キ、其醫ノ治ヲ受ケツツアリシガ腫脹漸次増加且化膿ノ徵アリシヲ以テ、同月八日金澤病院ニ入院ス。當時右大腿外側下部ニ小指頭大ノ射入口アリ、邊緣凹凸不平犬嚙狀ヲナシ創ノ内面ニハ膿樣物アリ、關節ハ著シク腫脹シ健側ニ比シ周徑増加スルコト約六仙餘、且皮膚稍、發赤アリ、該關節ハ稍、屈位ヲ執リ自働的屈曲約九十度伸展約百四十度ニシテ、之ヲ強ユレバ激痛アリ、觸診スルニ大腿骨下端外髁部ニ壓痛顯著ニシテ、創管ハ内下方ニ向ケルガ如シ、体温三十七度九分脈搏八十二至。

以上ノ症狀ニ由リ略ボ膝關節銃創ト診斷セシモ、尙ホ念ノ爲メ「レントゲン」照射及攝影ヲ行ヒタルニ、關節腔ニ示指頭大ノ彈影アリ、茲ニ於テ手術ヲ遂行スルコトニ決シ、翌九日腰髓麻醉ノ下ニ射入口ヲ開大セシガ彈丸ヲ見ズ、更ニ膝關節前ニ横切開ヲ加エ關節腔ヲ開キシニ、大腿骨外髁部ニ丁字狀ノ骨折及小指頭大ノ游離骨片アリ、尙外髁部ノ前上方ヨリ斜ニ下後方ニ穿通セル創管ヲ認メ膿樣物ノ蓄積著シ、更ニ創管ニ沿ヒ追進セシニ十字靱帶ノ下際ニ彈丸ノ存在セルアリ、由テ之ヲ摘出シ檢セシニ、鉛彈ニシテ少許リノ被服片ヲ附着シ、彈丸ノ直徑一・二仙重量約十四瓦ナリ、摘出後ハ骨折片ヲ除去シ、腔内膿樣血性物ヲ十分ニ排除シ、排膿管挿入「ガーゼタンボン」一部ノ皮膚ヲ縫合シ、ギブス繃帶ヲ以テ術ヲ終ル。

爾後一二日ヲ經ザルヲ以テ、豫後ノ斷定ハ困難ナルモ、到底強剛ハ免ルベカラザル所ナラン。

討論 七五三龜吉。 日露役從軍(當時歩兵中尉)沙河戰ノ際ニ三十メートル前ノ敵彈ヲ右肩胛部ヲ前方ヨリ肩胛骨

部ヲ貫通セラレタリ、受傷直時ニハ唯大ナル石ヲ以テ打撲セラレタルガ如キ感アリ、暫時ノ後右腋窩部ニ冷却物ノ流レルガ如キ感アリ、初メテ銃創ヲ蒙リタルヲ知レリ、爾後幸ヒニ經過佳良ニシテ現今ニテハ僅カ右肩胛關節ノ運動狹縮ヲ貽シタルノミナリ。

抄 録

內 科 學

○精神感動ガ結核病者ニ及ボス

影響ニ就テ

(細菌學雜誌第二百六十五號)

石 神 享

著者ハ結核病者ノ「オプソニン」検査ニ從事中精神感動ガ往々「オプソニン」陰性現象ヲ招來スル事アルニ注意シ、且ツキャンノン Cannon 氏ノ研究ノ結果精神感動ニ際シテ起ル種々ノ肉體的变化ハ「アドレナリン」分泌亢進及血糖量増加ニヨリテ説明シ得ベキヲ以テ、精神感動並ニ「アドレナリン」、葡萄糖ガ「オプソニン」現象ニ及ボス關係ニツキ實驗セリ。

即チ結核菌液ニ葡萄糖又ハ「アドレナリン」ヲ加ヘテ動物(家兎・白鼠・モルモット)ノ腹腔内ニ注射スレバ、白血球ノ結核菌ニ對スル喰菌作用ハ著シク阻害セラレ、又豫メ葡萄糖又ハ「アドレナリン」ヲ注射セル動物ノ腹腔内ニ菌液ヲ注射スルモ同様ノ關係アルヲ證明セリ。

次テ試験管内ニ於テ健康人血清ト「モルモット白血球」ヲ用キテ葡萄糖及「アドレナリン」ハ正常「オプソニン」作用ヲ抑制スル事實ヲ確メ、結核患者ニシテ糖尿ヲ證明シ得ザル四十例ニツキ其血液ヲ用キテ其喰菌作用ハ概シテ輕症患者ニ強ク重症患者ニ弱ク、「アドレナリン」及葡萄糖ハ其喰菌作用ヲ抑制スル力著シキヲ擧ゲ、精神感動ニヨル糖尿ヲ證セル二十例ニツキテハ喰菌率低下ノ更ニ甚ダシキヲ述べタリ。

著者ハ以上ノ成績ニヨリ(一)精神感動ノ爲一時期性糖尿ヲ來スモノ多ク、(二)葡萄糖及「アドレナリン」ハ共ニ「オプソニン」作用ヲ抑制シ、從テ(三)精神感動ノ際「オプソニン」率ノ低下スルヲ血中ノ「アドレナリン」並ニ糖量ノ増加ニヨルトシ、(四)精神感動ノ爲病勢ノ増悪スルハ主トシテ「オプソニン」率低下及消化機能ノ抑制ニ歸スベシト述べ、(五)更ニ我國ニ於ケル結核病者ノ青年ニ多キハ入學試驗等ノ爲ニ招來スル精神過勞ニ因ルベク、(六)又我國ニ於ケル青年男女ノ結核死亡率高キハ小學教員ニ結核患者多キ事與リテ力アリ、而モ小學教員ノ結核罹病率高キハ其精神過勞等ニ基クベシトナシ、教育制度ノ改善及小學教員ノ優遇ニ論及セリ。

○「アメーバ赤痢ニ對スル」エメチン療

法ノ實驗的研究

(日新醫學第七年第二號)

醫學士 志村 宗平

著者ハ先ヅ「アメーバ赤痢ノ動物感染試驗ヲ行ヒ、「アメーバ赤痢患者ノ新鮮ナル血性粘液便ハ患者ヲ異ニスルモ凡テ同様ノ感染力ヲ有スルヲ認め、小貓ノ体重三百乃至千瓦内外殊ニ哺乳期ノモノニ容易ニ感染シ千瓦以上ニテハ感受性薄弱トナリ殊ニ二千五百瓦以上ノ十分發育セル又ハ老イタルモノニ於テハ殆ド全ク感受セザルヲ見、クルーゼ Kruse、バスカール Pasquale、エーゲル Jaeger、ジェルゲンス Jürgens 等ノ觀察ニ一致セルヲ述べ、潜伏期ハ「アメーバ赤痢ノ新鮮ナル糞便ノ直腸内注入ニヨリ感染セシメ得タル小貓五十三疋ニテハ一乃至六日ニシテ就中三十七疋ハ一乃至三日、糞便中ノ嚢子ノ經口の試驗ニテハ四乃至六日ニシテ、經口的ニハ「アメーバ」ヲ以テシテハ感染セシメ得ザリシト述ベタリ。而シテ直腸注入法ニ依レルモノノ病變ハ大腸下部殊ニ直腸ニ形成セラレ經口的感染ニヨルモノハ盲腸部ニ占居スルヲ認め、組織的觀察ノ結果「アメーバ」ハ先ヅ腺ノ基底ニ侵入シ固有膜ヲ通過シ粘膜下組織ニ侵入ステフジェルゲンス氏說ヲ排シ、

先ヅ粘膜表面ヲ侵シテ原發性壞死ヲ起シ次デ粘膜下ニ侵入ステフドプテル Dopfer 氏說ニ加擔セリ。

次デ著者ハ猫ニ「エメチン」一回量〇・一疋乃至〇・五疋ヲ反覆注射スル時ハ嘔吐、全身違和等ノ副作用ヲ來スヲ見、千瓦以下ノ小貓ニ於テハ五疋ヲ以テ極量トセリ。

著者ハ以上ノ準備試驗ノ後小貓ノ試驗的アメーバ赤痢ニ對シ「エメチン」注射療法ヲ行ヒタリ。其結果ニヨレバ注射ヲ施セル三十八疋中臨床上「エメチン」ノ効ヲ認メタルモノ九例、認め得ザルモノ二十例、効不明ナルモノ九例ニシテ、其生存日數ニ至リテハ對照動物(十五疋)ハ四・四日、有効ナリシモノハ一・四日、効不明ノモノハ七・六日、無効ノモノハ五・六日ニテ一般ニ「エメチン」注射ヲ施セルモノハ對照動物ヨリモ平均生存日數長シ(但シ對照動物ハ自然ノ轉歸ヲトラシメ、注射動物ハ自然死又ハ撲殺死ニ至ラシメシ日數ヲ示ス)。

而シテ其解剖的組織的檢索ニヨレバ、
一、臨床上「エメチン」ノ有効ナリシ小貓ノ腸管ニ於テハ一般ニ炎症機轉極メテ輕微ニシテ假令「アメーバ」性潰瘍アルモ病勢進行阻礙セラレ又ハ停止シ治癒的傾向ヲ示シ、糞便中「アメーバ」ノ消失又ハ減少スルヲ見、腸内容多クハ有形便ヲ見タリ。

二、効果ノ不明ナルモノハ一般ニ有効ト無効トノ中間ニ位スル所見ヲ有ス。即チ粘膜ノ變化輕微ナルモノ多ク粘膜下組織ハ「エメチン」ノ有効ナリシ諸例ニ比シ一般ニ肥厚シ膿瘍或ハ壊死ヲ示ス事多ク小數ニ於テハ潰瘍治癒ノ傾向ヲ示スモノアリ。去レド組織的ニハ治癒傾向ヲ示サザルモノ多ク唯「アミーバ」ノ數ニ至リテハ割合ニ少ナシ。

三、其無効ナリシモノニ於テハ病變ハ大腸下部ニ潰瘍殊ニ大潰瘍ヲ形成シ腸内容物ハ一般ニ血性膿性粘液物質ニシテ感染輕度ナル時ハ病竈ハ腸粘膜ニ限局シ高度ノ充血ヲ示シ多核白血球浸潤及壊死等ヲ示シ、尙ホ高度ナル時ハ主トシテ粘膜下組織ニ及ビ膿瘍及壊死ヲ見ルナリ。此際「アミーバ」ハ粘膜下組織中ニ殊ニ多數存在シ屢々靜脈管腔及筋層間等ニ鏡檢シ得ト云ヘリ。

次ニ著者ハ「アミーバ」鏡檢ノ結果ニ就テ小猫ノ腸組織中ニ存スル「アミーバ」ハ其糞便中ニ在ルモノヨリモ一般ニ小ナル形態ヲ備フル事ハ人體ニ於ケルト同様ニシテ組織中ノ「アミーバ」ノ一部ハ退行變性ヲ示シ一部ハ小ナル形態トナルヲ云ヒ、大營養期「アミーバ」ハ元來組織内寄生的ニシテ病竈ノ基底及其周圍ニ存在シ病變ヲ擴大シ組織

ヲ破壊シ、小營養期型ハ腸内容中ニ寄生増殖シ得ルモノナリト推論セリ。

著者ハ以上ノ結果ヲ總括シ「エメチン」ハ單ニ大營養期「アミーバ」ヲ死滅セシムルノミナラズ又組織ノ再生機能ヲ促スノ効アリト結ベリ。(以上二件、內科學室橋教本抄)

○新催眠劑「カルモチン」ノ藥物

學的小實驗

(神經學雜誌第十六卷第十一號)

東京醫科大學精神病學教室

醫學士 佐藤 惇 一

著者ハ本邦製「プロムラール」ト稱シ漸ク世ニ知ラレツツアル一新劑「カルモチン」ニツキ公平ナル見地ヨリ藥物學的竝臨床的實驗ヲ行ヒタルヲ以テ其藥物學的實驗ノ結果ヲ發表セリ。先ヅ著者ハ本劑ノ構成及性質ヲ述ベエックホウト氏ガ「プロムラール」ニツキテナシタル動物試驗ノ結果ヲ紹介シ次ニ自己ガ專ラエ氏實驗法ニヨリテ確定シタル「カルモチン」ノ最小催眠量竝致死量及呼吸竝循環系統ニ對スル副作用有無ノ實驗成績ヲ報告セリ。

一、催眠量。

A 青蛙合 著者ハ「カルモチン」ノ〇・一%水溶液ヲ作り

法ニ從ヒ之ヲ口腔ヨリ腹部淋巴腔内ニ注射シ實驗セリ。而シテエ氏ノ行ヘル如キ「エムルジオン」ヲ皮下ニ注射スルノ法ハ吸収頗ル悪シク正確ナル結果ヲ得ルコト能ハズト唱ヘリ。前法ニ從ツテ最初青蛙四匹ニ體重一瓦ニツキ〇・一二密瓦、〇・一二九密瓦、〇・〇八一密瓦ヲ注射シ催眠最少量ハ少クトモ〇・〇八三三以上ナラザル可カラザルヲ知リ次回ノ實驗ニヨリ體重一瓦ニツキ〇・〇九密瓦ガ蛙ヲ確實ニ睡眠セシムル最少有効量ニシテ其就眠迄ノ時間ハ二十六分、睡眠時間三十七分ナルコトヲ論定セリ。之ヲ堀内學士ガ〇・〇九密瓦ノ「ブロムラール」ニツキテナシタル實驗成績ト比較スルニ前者ニ於テ是ヨリ早キコト十九分乃至二十二分ニシテ後者ニ於テハ是ヨリ長キコト十分乃至二十分ナルコトヲ知レリ。

B 家兔「カルモチン」〇・二瓦ヲ「アラビヤゴム」ニテ粘劑トナシ全量五〇立方仙迷トナシ「カテーテル」ニテ胃中ニ送入セリ。但シ動物ハ前日ヨリ空腹ニナシ置ケルモノトセリ。體重一基瓦ニ對シ〇・二瓦、一瓦等ノ割合ニテ服用實驗セル結果就眠迄ノ時間ハ平均五分ニシテ「ブロムラール」ノ夫レニ比シ大約半時間丈ケ早ク、睡眠時間ハ約十一時間半ニシテ「ブロムラール」ト略ボ匹

敵スルヲ見タリト。
二、循環器ニ對スル作用。

著者ハエ氏ノ「ブロムラール」ニツキテナセシ實驗方法ヲ襲蹈シ以テ夫レト比較セリ。即チ體重一四〇〇乃至一五〇〇瓦ノ家兔ニツキ體重一基瓦ニ對シ〇・七瓦ノ割合ニテ「アラビヤゴム」ヲ以テ泥劑トナシ全量五〇立方仙迷トナセルモノヲ「カテーテル」ヲ以テ胃中ニ送入シソノ熟睡ヲ確メタル後法ニ從ヒ兔ノ總頸動脈ニ水銀檢壓器ヲ接ギソノ血壓ヲ「トロンメル」ニ描カシメソレヲ附圖セリ。

- (一) 血壓ハ五例ニ於テ七四乃至七七密迷ヲ算ス。
- (二) 迷走神經ヲ法ノ如ク感傳電氣ニテ刺戟スルニ突然三五密迷降下シ刺戟ヲ止ムレバ再ビ舊位ニ上昇ス、之レ迷走神經ノ侵カサレザルノ證トナス可シ。
- (三) 若シ血管運動神經中樞ガ健全ナリトセバ之ニヨル刺戟加ハレバ血壓上昇スル理ナリ、今實驗動物ヲシテ氣管カニユーレ」外口ヲ閉ヂテ窒息セシムルニ血中ノ炭酸瓦斯ニヨリ血壓上昇セリ、之レ「カルモチン」ヲ與フルモ中樞健全ナル證ナリ。
- (四) 兔ノ腹部ヲ打撃セシニ血壓頻リニ動搖スルコト圖ノ如シ、コレ反射的血管運動障礙ナキ證ナリ。

右ノ實驗ニ於テ「ブロムラール」ト比スルニ(二)、(三)、(四)、ハ一致セリ、血壓降下ハ心臟ニ對シソノ機能ヲ弱ムルカ末梢血管ノ擴張ヲ來タスカ今俄ニ斷定ス可カラズ、而シ僅々〇・四密迷内外ノ減弱ハ深く顧慮スルノ値ハアラザルベシト。(普通家兔血壓八〇乃至一二〇)

三、致死量。

A 青蛙二・五%乃至三・〇%ノ藥液ヲ注射シタルモ確定シ得ザリキ、而シ堀内學士ガ「ブロムラール」ニ於テ體重一・〇瓦ニツキ〇・三三密瓦ヲ致死量トセルニ比シ稍々大ナル可キカト。

B 家兔。法ノ如ク「アラビヤゴム」末ニ混ジテ空腹時ニ服用ス、其結果體重一基瓦ニ對スル最少致死量ハ一・五瓦トス可ク致死ノ時間ハ四時間半ナリ、「ブロムラール」ノ夫レニ比シ約一時間五十分ノ永キヲ知レリ。
四、呼吸ニ對スル作用。

青蛙及家兔ニ於テ「ブロムラール」ト相伯仲シ而モ何等危険状態ヲ呈セザリシト。

最後ニ著者ハ兩劑ノ性状作用略ボ相、伯仲スルモ就眠迄ノ時間及催眠時間ハ該新劑ノ少シク優レルヲ見ルト結ベリ。

(神經科學教室廣橋抄)

醫 化 學

〇十日間ノ絶對飢餓ヲ試ミタル一青年ニ就キ行ヘル臨床的觀察及二三ノ尿成分ノ検査

(成醫會月報第四百二十七號)

醫學博士 生 沼 曹 六
醫學士 檜 田 五 郎

著者ハ十日間絶對ニ斷食セル一青年ニ就キ臨床的觀察及二三ノ尿成分ヲ検査シ次ノ結果ヲ得タリ。

一、臨床的觀察。

(イ) 被檢者ハ自覺的徵候トシテ身體違和、疲勞、嗜眠ヲ訴ヘ、他覺的ニハ身體各部ノ皮下脂肪組織ノ削瘦、貧血、反射機ノ減退ヲ認メ、心臟・肺臟ニ異常ナク、初メ臍部ニ位セシ胃下疝ハ飢餓ノ進ムニ從テ臍上二横指ニ達シ、腸部ヲ壓スルニ鳩鳴アリ、皮膚ノ發汗著シク、且ツ胸部ニ小豆大乃至豌豆大ノ發疹及紅斑ヲ見タリ。
(ロ) 體重ハ逐日減少スルモ、其ノ減少率ハ一定セズ。体温僅ニ低ク、脈搏少シク減ジ、呼吸ニハ其ノ變化ヲ認メズ。

二、尿成分ノ検査。

(イ) 總窒素。 飢餓ノ第一日ニ於ケル尿窒素量ハ七・四八九瓦即チ体重一疔ニ對シ〇・二四六瓦、第二日ハ体重一疔ニ對シ〇・三二六瓦ニシテ、爾後漸次減少シ、飢餓ノ最終日ニ於テハ体重一疔ニ對シ〇・一七三瓦ノ窒素ヲ排泄セリ。之レヲ食物攝取時ニ於ケル窒素平衡狀態維持ニ必要ナル最小限即チ体重一疔對〇・一二瓦ニ比スレバ著シク多シ。

(ロ) 尿素。 飢餓ノ第一日ニ於ケル尿窒素量ハ總窒素ノ九八・六五%ニ該當シ、之レヨリ日々減少シ、第八日ニ到リテ八八・五%トナレリ。蓋シ飢餓ノ進ムニ從テ尿素以外ノ窒素化合物ノ増加スルニ因ル。

(ハ) 尿酸排泄ハ尿素ニ於ケルガ如ク飢餓ノ進ムニ伴フテ漸々減少セリ。

(ニ) 「クレアチニン」。 「クレアチニン」ノ排泄量モ亦概ネ尿酸ト其ノ軌ヲ一ニシ、飢餓ノ進ムニ從ヒ總窒素ニ對スル割合ヲ減ジ、食物攝取時ニ第二日ニ於テ最低位ヲ示セリ。

(ホ) 「クロール」ノ排泄量ハ第一日ニ於テ七七・七五、第二日ニ於テ八九・二六三瓦ニシテ、之レヨリ急劇ニ低下シ、第五日目ヨリ徐々ニ減少シタルモ、飢餓ノ最終日ニ於テモ尙且ツ二・八八瓦ヲ排泄シ、食物攝取期ニ至リテ急

劇ニ増加セルハ他ノ例ト大ニ其ノ趣キヲ異ニセル所ナリ。

(ヘ) 尿ノ酸度ハ平日ト大差ナキモ食物ノ攝取期ニ至リテ却テ著シク減少セルハ注目ニ値ス。

(ト) 尿量ハ飢餓第四日以後ニ於テ大ニ減ジ、其ノ一日量五一六百ヲ算スルニ過ギザリキ、而シテ其ノ比重ハ略ボ生理的範圍ニ在リ。
(醫化學教室井上抄)

○ 不飽和脂酸ノ酸化ガ隈川、須藤氏脂

肪定量法ノ成績ニ及ボス影響ニ就テ

東京醫學會雜誌第三十一卷第十八號

東京醫科大學醫化學教室

醫學士 末 吉 雄 治

動物組織ヨリ分離シタル不飽和脂酸ヲ空氣中ニ放置スレバ酸素ヲ攝取シテ其重量ヲ増加スルコトハ Hartyeyノ實驗證明セル所ナリ。V. H. Mottram ハ此事實ニ看テ、隈川、須藤氏法ニ依リテ得タル脂酸ヲ乾燥スルニ當リテハ、須ク酸素ノ存セザル場所ニ於テ或ハ炭酸氣中ニ於テスベキヲ主張シ、之レガ實施法ヲ發表シタリ。著者(末吉氏)モ亦果シテ隈川、須藤氏法ニ依リテ得タル脂酸ヲ乾燥スルニ、斯クモ煩雜ナル處理ヲ必要トスルヤ否ヤヲ決定セ

ンガ爲メ、多量ノ不飽和脂酸基ヲ有スル亞麻仁油酸ニ就キ、一方ニハ五十度ノ空氣中ニ於テ乾燥シ、他方ニハ五十度眞空内ニ於テ乾燥スレバ、兩者ノ間ニ於テ一二→三二%ノ重量ノ相違ヲ看、隈川、須藤氏法ニ從ヒ肝臟ノ鹼化ニ依リテ得タル脂酸及不鹼化質ニ在リテハ其ノ空氣中ニ於ケルト、眞空内ニ於テ乾燥シタルトヲ問ハズ、僅ニ〇三→〇四%ノ重差ヲ示スニ過ギザルコトヲ看タリ。肝臟脂酸ハ稍々多量ノ不飽和脂酸ヲ有スルニモ拘ラズ、何故ニ鹼化ニ對シテ斯クモ大ナル抵抗ヲ有スルカヲ闡明センガ爲メ反復實驗シ、遂ニ「コレステリン」ノ共在ニ由來スルコトヲ確定シタリ。即チ動物組織中ニハ到ル處不飽和脂酸ノ有スルト同時ニ「コレステリン」ヲモ存スルガ故ニ、隈川、須藤氏法ニ倣ヒテ抽出シタル脂酸及コレステリン」混合物ヲ五十度ニ於テ、而カモ空氣中ニ於テ乾燥スルモ概ネ何等ノ誤謬ヲ醸スコトナキヲ決定シ、隈川、須藤氏法ニ一層ノ保證ヲ與ヘタリ。

之ヨリ先著者ハ亞麻仁油酸ナル不飽和脂酸ノ「エーテル溶液ニ白金黑(觸媒)ヲ加ヘ、之レニ水素ヲ作用セシメテ不飽和脂酸ヲ完全ニ飽和状態トナシ得ルコトニ成功シ、延テ本法ヲ肝臟ヨリ得タル脂酸ニ應用シタルモ遂ニ完全ニ水素ヲ附加シ能ハザルコトヲ證明シ、此ノ水素附加法

(還元法)ガ隈川、須藤氏法ニ依リテ得タル脂酸ヲ安定状態ニ變ゼシムルコト能ハザルコトヲ明カニセリ。

(醫化學教室毛利抄)

○血合肉ノ化學ニ就テ

(東京化學會誌第三十八帙第十號)

農學士 與 田 讓

著者ハ鯉ノ普通肉及ビ血合肉ニ於ケル窒素燐酸及ビ硫黃ノ形態、無機成分ノ分布ヲ研究シ、且ツ兩者ノ「エクス分」ヲ分離シ、加之各種ノ肉蛋白ヲ加水分解シテ「アミノ酸」及ビ「プリン鹽基」ノ存在並ビニ其量的關係ヲ研究シ、大要次ノ結果ヲ得タリ。

血合肉ハ大ナル活動性ヲ有スル魚類ニ特別ナル筋肉ニシテ、普通肉ニ比シ「エーテルエクス」¹「レチチン」²「タウリン」³「ヘモグロビン」⁴「グアニン」⁵「ヒポクサンチン」⁶「ヒスチジン」⁷等ノ量ニ於テ著シク優レリ。

著者ハ血合肉成分トシテ多量ノ「エーテルエクス」¹「レチチン」²「ヘモグロビン」⁴等ノ存スルハ此種ノ魚類ノ大ナル活動性ト深キ關係アルベキモノナルヲ附言セリ。

(醫化學教室林田抄)

○「フェノールフタリン法」ニ依ル潜出

血證明法ノ臨床的價値ニ就キテ

(日本消化機病學會雜誌第十六卷第五號)

醫學士 矢尾板誠策

日野 三郎

糞便ニ就キテ胃腸ニ於ケル潜出血ヲ證明セント欲セバ、須ク先ヅ血液ヲ含有スル食餌ニ由來スル錯誤ヲ回避スルヲ要ス。然ルニ數日ニ涉リテ血色素ヲ含マザル食物ヲ攝取スル事ハ患者ノ甚ダ嫌惡スル所ナリ。茲ニ於テカ著者ハ可及的血色素量ノ少キ魚肉ヲ選ビ、其ノ多量ニ與ヘ、現今ニ於ケル最モ銳敏ナル試驗法ヲ行フモ尙ホ且ツ糞便ニ血色素ヲ證明シ得ザラシメン事ヲ期シ、日常食膳ニ供セラルル二十有餘種ノ魚肉及獸肉ニツキテ血色素量ヲ測定シタルニ、さわだ鮪ニ於テ最大値ヲ、白魚ニ於テ最低値ヲ得、鰈・鱒・鯛等モ亦白身魚肉中比較的血色素量少キコトヲ證明シ、加フルニ是等ノ血色素ニ乏シク且ツ四期ヲ通ジテ得易キモノハ比目魚ナル事ヲ斷ゼリ。茲ニ於テ著者ハ前後三回六人ニ比目魚ヲ與ヘ、糞便ヨリ血色素及其誘導体ヲ抽出スルニハ醋酸エーテル「醋酸アルコホル」醋酸エーテル「アルコホル」ヲ用キ血色素ヲ檢スルニ「フェノールフタリン法」ヲ用キタランニハ如何ノ反應ヲ呈

スルヤヲ檢シ、次ノ結果ヲ得タリ。

- 一、食餌ニ一定ノ制限ヲ加ヘ、且ツ抽出溶媒ヲ一定スルバ「フェノールフタリン」試驗法ニヨルモ食餌ニ由來スル錯誤ヲ回避スルヲ得、即チ醋酸エーテル「又ハ醋酸エーテル」アルコホル」ヲ以テ糞便ヲ處理スレバ每一日百六十瓦ノ白身魚肉ノ刺身又ハ煮肴ヲ與フルモ誤認ニ陥ル事ナク、醋酸アルコホル」ヲ用フルニ當リテハ百六十瓦以下ニ減ズルヲ要スベシ。此魚肉ヲ數十日ニ涉リテ患者ニ與フルモ何等嫌惡ノ念ヲ起サシムル事ナシ。
- 二、一日一行正規的ニ排便ヲ見タル場合ニ於テモ、試驗食ヲ與ヘタル後四日ヲ經ルニ非ズンバ潜出血検査ニ着手スベカラズ、便秘又下痢ハ此期日ニ變動ヲ與フルヤ勿論ナリ。

(醫化學教室今井抄)

病 理 學

○門脈ヨリ送入セラレタル異物ノ沈着ニ因スル肝臟ノ變化就中日本住血吸蟲病ニ於ケル肝硬變ノ成因ニ就キテ

(京都醫學雜誌第十四卷第五號及第六號)

京都醫科大學病理學教室

醫學博士 清野謙次

肝臟機能ノ形態學的研究ニ關シテ囊ニ清野氏ハ脾臟剔出後ニ於ケル肝臟ノ變化ヲ論ジタルガ、本報告ニ於テハ著者等ハ先ヅ常態肝臟ノ構造ニ就テ詳論シ、組織球形細胞ガ物質代謝ノ調節裝置タルコトヲ明カニシ、又肝臟結核症ノ初發性變化ニ就テ記載シ、ラ氏巨態細胞モ畢竟異物巨態細胞ト同一種ノモノナリトセリ。著者等ハ「オリ―ブ油、肝油等ノ各種液狀油滴、澱粉粒、石松子ヲ家兔ノ門靜脈枝即チ腸間脈靜脈ヨリ注入シ、其物質ニ由リ一方實驗的ニ日本住血吸蟲病ニ感染セシメタル動物ニ就キ其卵子ニ由リ肝ニ生ズル栓塞部ノ組織ノ反應狀態ヲ生体色素攝取ニ依リテ研究セリ。其結論ノ梗概ヲ記セバ左ノ如シ。微細異物ノ分量著シク多クシテ星芒細胞ガ刺戟セラシル時ハ此細胞ガ肥大シテ出來得ル限り多量ノ物質ヲ攝取食スルニ至ル。肥大セシ細胞ハ多クノ場合血管壁ヨリ脱落ス更ニ一步ヲ進ムル時ハ増殖シテ同種細胞ノ數ヲ増シ、又巨態細胞ニ至ル、是レ局所ニ於ケル種々ノ異性質ヲ排除スルナリ、斯カル極端ナル場合ニ於テハ通常炎症ヲ伴フモノニシテ結核窠形成ノ如キ之レナリ。而テ肝臟結核窠ニ於ケル實驗的炭粉沈着ハ炎窠ノ生ジタル爲体液交通路ト物質沈着部ニ變動ヲ來セシ結果ナリ。血球

ヨリモ大ナル液狀及固形異物ニ對シテ肝臟ハ葉間結締織内ノ門脈枝ニ栓塞ヲ生ゼシメ此等異物ガ下行大靜脈血中ニ流入スルヲ防止ス。栓塞局所ニ於テハ常ニ炎症ヲ生ジ異物ノ消失ニ勉ム。而テ異物ノ組織内ニ於ケル抵抗ノ強弱及異物ノ刺戟性ニ應ジテ局所組織ノ反應ニハ數量的差違アリ局所葉間結締織及血液ヨリ組織球形細胞ヲ誘致スルノ他血管内皮細胞ノ一部ハ適應刺戟ノ下ニ組織球形巨態細胞ニ變態ス。其他血液及組織ヨリ淋巴球、多核白血球等遊走細胞ノ集簇アリ。結締織細胞ト内皮細胞トノ増殖アリ。病變ヲ局限セシメ各種細胞ノ機能ニヨリテ刺戟性異物ヲ除去ス。肝實質細胞ハ此際壞死、消耗スルニ至ル。單純ナル器械的刺戟ヲ主トセル液狀及固形異物ニヨリテハ組織反應ハ主トシテ血管内ニ局在シ實質ノ變少ナキガ故ニ肝臟ノ形態ニ著變無シ。稍々強キ刺戟性油滴（「シヤルフット紅加オリ―ブ油肝油」）ニテハ組織反應少シク強キモ肉眼的ニ著變無シ。強ク刺戟スル油滴（「クレヲノ―ト加油」）ニ於テハ刺戟ノ強弱ト栓塞ノ多寡ニ應ジテ葉間結締織及肝實質ニ壞死ヲ生ジ之ニ相當シテ結締織ノ増殖アルガ故ニ其結果ニ於テ日本住血吸蟲病肝ニ類似セル肝硬變ヲ生ズ。然レドモ日本住血吸蟲病ニ於ケル肝硬變ハ甚ダ固有ナル變ヲ呈シ來ル是レ蟲卵内部ノ仔蟲ガ

成熟期ニ産出スル強烈ナル毒素ノ作用ニヨリテ多量ノ肉芽組織ヲ新生シ、強キ結締織ノ増殖アリ、結節附近ニ於ケル實質細胞ノ消耗ヲ伴ヒテ甚ダ不平等ナル葉間結締織ノ肥厚ヲ生ズルナリ。本蟲ノ毒素ハ仔蟲成熟ノ初期ニ產生セラルルコト最モ強ク仔蟲死滅後ハ毒作用消失シ卵子ハ單純ナル器械的刺戟アル異物トシテ作用スルニ過ギズ。蟲卵ガ毒素ヲ産出スルコトハ蟲卵ガ腸粘膜ヨリ糞便中ニ脱出スル上ニ著シキ便宜アリ、サレバ毒素産出ハ住血吸蟲ノ種族保存上仔蟲自家ニ取リテハ必要ナルコトナリ。日本住血吸蟲病肝硬變ノ特異ナル形態ハ蟲卵栓塞部位ガ所ニヨリ著シク不同ナル爲間質結締織ノ増殖ト實質細胞ノ消耗モ所ニヨリテ著シク不平等ナルガタメナリ。

(病理學教室垂水抄)

○脾臟ノ原發性肉腫ニ就テ

(京都醫學雜誌第十四卷第六號)

京都醫科大學病理學教室

醫學士 宇野規矩治

脾臟ノ惡性腫瘍ハ稀有ニシテ脾臟ハ全臟器殆ンド靜脈竇ヨリ成リ血流緩除ニシテ腫瘍細胞ノ沈着ニ適スルガ如クナレドモ實際其ノ少キハ臟器ノ免疫力ニ據ルベシトノ見解ヲ持セル學者尠ナカラズ。

脾臟腫瘍ノ中最も重要ナルハ肉腫ニシテ圓形細胞肉腫ノ他ハ其ノ性狀ト命名トニヨリ起源ヲ察知スルニ堪ユレドモ唯圓形細胞肉腫ノミハ未ダ深ク檢索セル者ナシ。著者ハ其ノ一例(三十九歳ノ男ニシテ脾臟ハ著シク大トナリ、全部殆ンド腫瘍塊ヨリ占メラレシモノナリ)ヲ得テ詳細ナル探索ヲ試ミタリ。

先ヅ本腫瘍ノ主成分タル嗜鹽基性無顆粒單核細胞ガ淋巴成形細胞ナリヤ或ハ骨髓成形細胞ナリヤニツキ探究シ前者ナル事ヲ確メ、而カモ細胞ノ性狀ニ於テ多クハ大形淋巴球殊ニ種子中心細胞ニ相當セル者ナル事ヲ知リタリ。加之、細胞相互ノ配列並ニ組織構造ニ於テモ淋巴組織ニ一致スル所アリ。サレバ本腫瘍ハ其組織ノ性狀ニ於テ最モヨリ濾胞組織ニ似同セル所アリ。

故ニ本例ハ恐ク種子中心細胞即チ淋巴成形細胞ヨリ形成セラレタルモノニシテ原發竈ハ脾臟濾胞ナリト思考スベシト。

(病理學教室棚橋抄)

○脊椎動物肺呼吸腔ノ組織學的研究

(京都醫學雜誌第十四卷第六號)

京都醫科大學解剖學教室

醫學士 小川睦之輔

爾來肺臟ニ關スル組織的研究ハ多ク斷片的ニシテ脊椎動

物ノ各階級ヲ通ジテコレガ比較究査セルモノ殆ンドナシ。著者茲ヲ以テ兩棲類、爬蟲類、鳥類、哺乳類ニ互リ呼吸上皮、筋纖維、彈力纖維、格子狀纖維、固有膜等ヲ研究シ次ノ如ク述ベタリ。

一、兩棲類呼吸上皮ハ一形種ニシテ扁平部及ビ有核部ヨリ成ルモ爬蟲類ニアリテハ其ニ有核ナル大形扁平細胞及ビ小形細胞ノ二種ヨリ成ル、從テ兩棲類トハ同規ニアラズ。

二、呼吸上皮ハ蠃蟧、蛙、はんざき等ニ於テ形態及ビ被覆狀況等ヲ多少異ニス。

三、爬蟲類呼吸上皮大形扁平細胞ノ核ノ存在ハ確實ナリ。四、縞蛇呼吸上皮ノ分布ハ部位ニヨリ差等アリ。

五、守宮呼吸上皮ニ於ケル二種細胞ノ大サノ差隔ハ蛇肺ニ比シ著シク小ナリ、小形細胞ハ屢々一個又ハ數個集マリテ半月形、馬蹄鐵形等ヲ呈シ廣濶ナル毛細管ノ一侧ニ扁在シ、大形細胞トノ境界線ハ毛細管匡廓ニ沿ヒテ存スルコト多シ。

六、鳥類呼吸上皮及ビ土龍、蝙蝠ノ呼吸上皮ノ缺如ハ眞ナルガ如シ。

七、哺乳類ノ大形無核細胞ノ無核ナル事實ヲ確證セリ。

八、哺乳類呼吸上皮ニ關スル *Langso* ノ研究ハ誤謬ナリ。

九、哺乳類呼吸上皮ノ扁平細胞ヲ以テ有核細胞ノ突起ナリトスル說ハ根據ナシ、扁平細胞ハ全ク獨立スル細胞ナリ。

十、家兔ニ於テ胎生初期ノ呼吸上皮ハ一種ノ骰子形細胞ヨリナルモ、末期ニ近ヅクニ從ヒ漸次扁平トナリ、極メテ末期ニ至ルトキハ呼吸ヲ俟タズシテ二形種ニ分化ス、扁平細胞ノ核消失モ末期ナリ。

十一、初生仔呼吸上皮二形種成因ニ關スル *Kittner, Croix, Schulze, Kolliker* 等ノ說ハ充分ナラズ、一ツハ胎生時ニ於ケル肺胞及ビ毛細管ノ發育増大ニ由リ一部ノ上皮ノ伸展性ヲ増加シニハ之レニ呼吸開始ノ際ニ急劇ナル肺胞擴張ノ加ハリテ扁平細胞ノ生ズルニ由ル。

十二、扁平無核細胞ノ再生補填ハ小形有核細胞ノ伸展及ビ核ノ消失ニヨリ行ハルガ如シ。

十三、肺呼吸腔筋纖維ハ蠃蟧ニ於テ散在性ナリはんざきに於テハ集結シテ強キ條束ヲナス。蛙、龜ニアリテハ強キ條束ヲナスモノト散在性ノモノトアリ。蛇、守宮ノ筋纖維ハ主トシテ條束ヲナシ上記ノモノニ比シ發育弱シ。

十四、蝙蝠ノ肺胞系統ニハ全然筋纖維ヲ缺ク。著者ノ檢

セシ哺乳動物ハ肺胞管口ニ於テ一條乃至數條ノ筋纖維ヲ有ス肺胞口縁ノ筋纖維ハ犬、人ニアリテ一部ノ肺胞口ニノミアリ、猫肺ノ肺胞口ハ大部分筋纖維ヲ藏ス、肺胞壁ノ筋纖維ハ猫、犬、人ニアリテ罕ニ見ルノミ。

十五、蝶螈ノ彈力纖維ハ内外二層ヲ區別ス。著者ノ檢セシ兩棲類、爬蟲類ニ於テモ多少ノ差異アリ。

十六、土龍、蝙蝠肺ノ彈力纖維ハ肺胞、管口及ビ肺胞口ノ周圍ニ弱キ環輪ヲ形成シ、之レヨリ肺胞壁ニ僅微ノ纖維ヲ派ス。家兔肺ハ鼠、海狼肺ヨリ山羊、猫、犬、人肺ハ家兔肺ヨリ彈力纖維ヲ増ス。人肺ニ於ケル *Insler*, *Oros* 及 *Otolanghi* ノ説ハ首肯シ難シ。

十七、守宮、蛇ノ肺ノ格子狀纖維ハ二系ニ區別シ得。

十八、土龍、蝙蝠ノ肺胞管口及ビ肺胞口ノ格子狀纖維ハ多ク一條ノ環狀纖維ヨリ成ル、而シテ肺胞系統ノ格子狀纖維ハ連繫セル一大支格ヲナス、コノ環輪ヨリ肺胞壁ニ向ヒ數條ノ纖細ナル纖維ヲ派ス鼠、海狼ニアリテハ纖維ハ粗剛網羅ハ密トナリ殊ニ海狼ニ於テハ肺胞壁ノ纖維ハ一、二ノ主條ヲ混ズ。家兔、猫、犬、人ニ至ツテハ纖維ハ緻密且ツ吻合狀多様ナリ。

十九、胎仔ノ格子狀纖維ハ成熟動物ニ比シ纖細ニシテ屈曲少シ。

二十、哺乳類ノ肺胞管口及ビ肺胞口ノ彈力纖維ハ常ニ該筋纖維及ビ格子狀纖維ニ比シ表在的ナリ。

二十一、肺胞固有膜ヲ以テ彈力膜ナリトノ説ハ不當ナリ。

二十二、肺胞孔ハ正常ノ構造ナリ。

二十三、土龍、蝙蝠ノ呼吸腔ノ構造ハ低級ニシテ鳥類ニ近シ。

(病理學教室服部抄)

○腎臟ニ於ケル螺旋狀體ノ發現ニ就テ

(醫海時報第千二百二十號)

醫學博士 今 裕 綿引朝光 岡崎光久

川合五郎 今村七三郎 寺田正中

矢崎芳夫

著者ハ發疹チフスノ病原的研究ノ動機ヨリ、七十六例(内五十例ハ屍體ヨリ、二十六例ハ手術的ニ剔出セシモノ)ノ各種疾病ニ於ケル腎臟ニ就テレワヂチー法ヲ施シ、精細ニ檢シ屍體材料中二十五例ニ手術材料中十五例ニ螺旋狀體ヲ見出セリ。該體ハ主トシテ細尿管内所謂硝子樣圓壻若クハ硝子樣凝固物中ニ存ス。殊ニ皮質ニ於テナリトス。其他顆粒狀内容中ニモ存ス、ポーマン氏囊内又先天性囊胞腎ノ内容中ニモ見ラルル事アリ。其大サ必ズシモ一定セズ、六乃至十「ミクロン」ヲ普通トスレドモ、

小ナルハ四乃至五「ミクロン」、大ナルハ十六稀ニ二十二「ミクロン」ヲ算スル事アリ。細キハ「バリダ」ニ一致スルモ、太キハ之ヲ越ス。回轉ハ規則正シキ螺旋狀ヲナスモノ、不規則ニシテ深キ彎狀回轉アルモノ及ビ緩波狀ヲナスモノヲ區別ス。該体ハ形態上「スピロヘーテ」ト區別スベカラザルモ、著者ハ本態ト「スピロヘーテ」トナス事ヲ敢テセズ。

(病理學教室中村抄)

細菌學

○「コレラ菌及ビ腸チフス菌混合ワク

シン」ヲ注射シタル人血清ノ殺菌力

(衛生學傳染病學雜誌第十三卷三號)

坂上弘藏

著者ハ、腸チフス菌及「コレラ菌」ニ對スル、健康人血清ノ殺菌力ヲ検査シ、次デ腸チフス菌及「コレラ菌」混合ワクシン」ヲ自体ニ注射シタル後、自体ヨリ血清ヲ採取シ、該血清ノ腸チフス菌及「コレラ菌」ニ對スル殺菌力ヲ研究實驗シテ、次ノ結論ニ到達セリ。

一、健康人血清ノ「コレラ菌」及「チフス菌」ニ對スル殺菌作用ハ、著明ナレドモ、一時間以内ニテハ、多數ノ菌ヲ

殺菌シ得ズ。

二、「コレラ菌」及腸チフス菌混合ワクシン」第一回注射後、七日目ノ自体血清ハ、一時間以内ニ於テ其殺菌作用著明ナリ。

三、第一回注射後、九日目ノ血清ヲ加熱シタル場合ニハ「コレラ菌」ニ對シ著シク其作用ヲ失フ。

四、第二回注射後三日目ノ血清ハ第一回注射後七日目ノ血清ニ比スレバ殺菌力ヲ現ス事稍々遅クシテ時ヲ要セリ。

五、第二回注射後四日目ノ血清ヲ以テ試驗時間二十四時間ヲ經ル時ハ兩菌ニ對シテ共ニ著シキ殺菌力ヲ逞フス。

六、第二回注射後六日目ノ血清ハ共ニ強度ノ殺菌作用ヲ呈ス。

七、自体ニ注射セシ「コレラ菌」及「チフス菌」ノ混合ワクシン」ハ互ニ其作用ヲ牽制スルコトナク共ニ著明ノ殺菌作用ヲ現セリ。

(細菌學教室井東抄)

○感作コレラワクシン」ノ實驗的

研究及實地應用

(細菌學雜誌二百六十五號)

醫學士 矢部專之助

著者ハ大正五年東京府ニ於ケル「コレラ」病流行時ニ際シ

豫防ノ目的ヲ以テ實施セラレタル感作コレラワクシン」ノ接種成績ヲ調査シ次ノ結果ヲ發表セリ。

東京市現住人二、二四四、七九六人中感作ワクシン」ノ注射ヲ受ケタルモノ二二三八、九三六人ニシテ人口百ニ對シ二〇・六四人ナリ其内三人ノ罹病者ヲ出シタリ故ニ一萬人ニ對シ〇・二三人ノ割合ナリ未接種者ヨリノ罹病者ハ三七二人ニシテ一萬人ニ對シ一・八五人ナリ死亡率ハ未接種者ハ六一%ニテ接種者ハ六六%ナリ。

府下ニ於テハ現在人口八一、二五〇人中接種者六一、九八八人ニテ罹病率八〇ナリ未接種者ノ罹病者ハ二二九人ニテ人口一萬ニ對シ三〇・九ナリ。

○細菌体ノ成分及ビ其分解物ノ免疫學的的研究

(細菌學雜誌二百六十五號)

大阪血清藥院研究部(顧問佐多博士)

目黒庸三郎

著者ハ窒扶斯、「バラチフス」、赤痢、虎列刺、大腸菌等ヲ鹽酸ペプシン、及「トリプシン」、及「エレプシン」等ノ蛋白消化酵素ヲ以テ消化シ其分解産物ニ就キ免疫學的方面ノ研究ヲ行ヒ左ノ結論ヲ下セリ。

一、窒扶斯、「バラチフス菌」、赤痢菌、虎列刺菌、大腸

菌等ヨリ分離シタル「リポイード」ハ各種特異性ヲ有シ家兎ニ注射スル時ハ特種抗体ヲ形成スルノ作用アリ該「リポイード」ニ「リバーゼ」ヲ作用セシムルモ亦100〇ニ一時間熱スルモ其特種抗体形成作用ヲ失フコトナシ。

二、細菌リポイード」ハ抗体形成ニ作用シ、同名菌ノ抗体ト結合スルモ異名菌ノ抗体ト結合セズ。

三、細菌ヲ蛋白消化酵素ヲ以テ消化シ「ピウレット」反應ヲ呈セザル迄分解スルモ尙ホ細菌固有ノ性ヲ失ハズ、反之細菌ヲ酸加水分離スルトキハ細菌蛋白ハ分解セラレテ無毒化ス。四〇・五%ノ鹽酸及「ペプシン」ヲ以テ細菌ヲ消化スルトキハ其分解物ハ「ピウレット」反應ヲ有スルモ、動物ニ對シテ毒性ナク亦「アンチゲン」作用ヲ失フ、而シテ〇・〇五%鹽酸及「ペプシン」ノ分解物ハ等シク「ピウレット」反應ヲ有スレドモ、尙ホ毒性及ビ抗体形成作用ヲ保有ス。

(以上二件、細菌教室堀木抄)

外科學

○胸腹腔ニ於ケル蓄膿ノ一新療法

(中外醫事新報第九百三號)

ドクトル 齋藤終平

蓄膿治療ノ方法ハ排膿ト起因物ノ除去及其物ヲ無害ニナスコトヲ目的トナス。腹腔蓄膿ハ内科的療法ニヨリ完全ニ治療セシメ得ルコトハ甚ダ稀ナリ、主トシテ外科的手術ニヨラザルベカラズ、膿胸ニアリテハ胸廓及肺ノ萎縮ヲ避ケ、一時萎縮シタル肺ノ緊張力ノ恢復ヲ計ルヲ要ス、故ニ可及的早期ニ排膿セザルベカラズ、又起因物ヲ除去スルニハ藥物或ハ手術的操作ニヨラザルベカラズトテ膿胸ノ療法トシテ單純ナル穿刺排膿法、ビュロー氏ノ「ヘーベルドレナージ」、開胸術及排膿後藥液注入法ヲ擧ゲタリ、著者ハローゼンバツハ氏ノ法ヲ改正シ、竹中成憲氏ノ肋膜炎患者ニ沃度仿護肝油ヲ使用セシ報告ニ基キ、膿胸患者一名、化膿性腹膜炎患者二名ニ二%沃度仿護肝油、又ハ沃度仿護ヨヂピン」ヲ使用シテ好成績ヲ得タリ。從來使用セラレタル沃度仿護グリセリン」ハ乳劑トシテ使用スル外ナシ、著者ハ沃度仿護ノ各種ノ油類ニ溶解スル程度ヲ驗シ、肝油ガ最モ良好ニシテ「ヨヂピン」之ニ次グラ認メ、豫メ沃度仿護ヲ乳鉢ニテ研磨細碎シ、之ニ相當量ノ肝油又ハ「ヨヂピン」ヲ注加シ、更ニ攪拌溶解ス、之ヲ六十度乃至八十度ノ温ニテ間歇減菌シテ使用セリ。

結論トシテ

一、胸腹腔内蓄膿ヲ穿刺排膿後沃度仿護肝或ハ同「ヨヂ

ピン」ノ注入療法ハ甚ダ有効ナリ、而モ前者ヨリ後者ノ使用ガ優レルヲ見ル。

二、本法施行後一晝夜間患者ハ体温昇騰シ脈頻數嘔吐等ヲ發スルモ後ニハ消退シテ其他ノ副、後作用ヲ認メズ。
三、病機ノ何タルヲ問ハズ、胸腹腔ニ於テ探膿シ得タルトキハ根治的手術ヲナス前ニ必ず試ムベキ良法ナリト信ズ。

○腹膜癒着ニ關スル實驗的研究

(日新醫學第七年第一號)

醫學士 保々輝 雄

腹腔ニ於ケル種々ノ外科的手術後ニ發生スル腹膜ノ癒着ヲ豫防スルハ目下ノ一大急務ニシテ、多少ノ認ムベキ効果アル法アランカ是確カニ腹腔外科ニ於ケル一進歩ト云フベシ。著者ハ從來知ラレタル腹膜癒着並ニ癒着豫防ニ關スル文獻ヲ擧ゲ、其中ポープ氏ノ枸橼酸ナトリウム」二%、食鹽三%ノ水溶液ヲ腹腔内ニ注入シテ纖維素性癒着ヲ防止セントスル化學的療法ハ理論上興味ヲ喚起セラレタルモノナルモ、其實驗並ニ證據ニ向ツテハ多少ノ疑點無キニアラズトナシ、家兔及犬ニ於テポープ氏ノ證據及其所定液ノ應用ニ就テ實驗ヲ繰返シ、併テ從來ノ方法

中粘滑物質ノ應用ガ果シテ癒着豫防ニ効果アルヤ否ヤヲモ實驗シテ次ノ如ク結論セリ。

一、腹膜癒着豫防ニ關スル實驗ハ、其基礎トシテ最モ確實ナル癒着惹起ノ誘因タルベキモノヲ選定セザルベカラズ。然ラザレバ往々誤リタル結果ヲ見ルコトアリ。

二、腸壁腹膜ノ小搔爬傷、大網膜ノ結紮切除、膜壁腹膜ノ切除、「マグネシウム」粉末ノ散布等ハ癒着ノ誘因トナリ得ルモ確實ナラズ。

三、小腸面ヲ摩擦シ出血ニ至ラシメ、二%沃度丁麩及ルゴール氏液ヲ塗布スルトキハ鞏固ノ癒着ヲ起ス。

四、ポーフ氏所定液ヲ腹腔内ニ注入スルニ、吸収速ニシテ癒着豫防作用ヲ認メ得ズ。

五、「オレーフ油」、「ラノリン」、「ワゼリン」、流動バラフィン」等ノ粘滑物質ノ同上價値モ亦薄弱ナリ。

六、腹膜癒着豫防ニ關シテハ、從來幾多ノ報告アルモ實地應用ノ範圍ニ於テハ、一トシテ成績確實ナルモノナキガ如シ。
(以上二件、外科學教室高森抄)

○膀胱炎ノ膀胱鏡的所見

(臨牀醫學第五年第十五號)

佐 谷 有 吉

膀胱炎ニ於ケル病變ノ種類、狀態、部位ノ確定又ハ膀胱腫瘍ノ診斷或ハ腎臟機能等ノ確實ナル診斷ヲ下ダシ得ルル唯膀胱鏡検査ニ依ルベシ。

膀胱炎四十六例ニツキ。一、近接部ヨリ蔓延セルモノ。二、隱發性又ハ特發性膀胱炎。三、外傷性膀胱炎。四、尿閉ニ伴フモノ。五、腫瘍性膀胱炎。六、結核性膀胱炎ノ六項ニ分チ膀胱洗滌法及其内容量等ヲ説キ膀胱鏡挿入ノ可否ヲ論ジ次ニ検査上ノ注意ニ及ビ膀胱内容ノ所見ヲ各部ニ分チ。一、膀胱前壁ハ氣胞アルヲ以テ位置ヲ知り局部ノ疾患ハ稀ニシテ慢性單純性膀胱炎或ハ尿閉ノ結果膀胱炎ヲ喚起セル時即尿道狹窄攝護腺肥大等粘膜全部殆ド一樣ニ變化セル時ニ來ルモ尿意頻數ヲ訴ヘ尿ノ溜溜スルコト少ナキ時ハ殆ド前壁ハ健常ナリ。二、膀胱側壁ハ前者ヨリモ罹患スルコト多シ腫瘍ノ發生、殊ニ結核性潰瘍結節少ナカラズ。三、膀胱底ハ兩側輸尿管開口部ト内尿道孔ノ三點ヲ聯絡スル三角部ト其後ニアル狭小ナル三角後部ニシテ平滑ナル部ナリ病變ノ大半ハ此處ニ存在ス尿意頻數放尿時ノ疼痛等自覺症最モ強シ殊ニ攝護腺肥大症ヲ知り結核症ノ輸尿管孔附近ニ多ク特發性膀胱炎結石等膀胱底部ハ膀胱鏡検査ニ最モ注意シテ觀察ヲ要スル處ニシテ輸尿管孔ハ患部ノ位置ヲ定ムルニ必要ナリ其形體

常ノモノニテモ多少差異アルモ疾病ニ依リテ一定ノ變化ヲナス。

○腎臟觸診法ニ就キテ

(實驗醫報第四年第三十七號)

杉村七太郎

一、仰臥位雙手觸診法(チュフ井エー氏、リッテン氏法)ハ仰臥位ニ於テ脚部ヲ屈シ腹部ヲ遲緩セシメテ腎臟部ヲ呼吸ニツレテ前後ヨリ雙手ニテ觸スル法ニシテ半坐仰臥(シューデ氏法)ハ半坐位又ハ骨盤高位トシテ觸診スル法ナリ。

二、側臥位雙手觸診法(イズラエール氏及モリス氏法)ハ半臥位ニ於テ健側ヲ下ニシ患腎ヲ上ニシテ微シク前方ニ沈下セシメ深呼吸ニツレテ觸スル法ナリ又側臥彎曲位雙手觸診法トシテ枕ヲ健側肋骨腸骨間空隙下ニ横タヘ軀軀ヲ患腎ノ方向ニ弓形ニ彎曲セシメテ觸診スルモノ。

三、ギヨン氏腎跳動検査法ハ短ク急突ヲ與ヘ其跳動ヲ觸レテ腎ノ腫大、位置、形狀、硬度等ヲ知ル法ニシテ仰臥半坐位、骨盤高位、側臥位ニ於テモ行フコトヲ得。

四、グレナール氏腎侵襲法又拇指法ハ腎ノ異常ノ移動ヲ

確知スル法ニシテ拇指ヲ前方ニ他ノ四指ヲ後方ニ向ハシ他手ヲ前方ニ置キテ呼氣ニ乗ジ、埋伏、捕捉及遁逃ノ時期ヲ知ル法ナリ。

以上諸種ノ法ヲ行フニ腸内容ノ排除或ハ浴湯内觸診又ハ麻酔ヲ要スルコトアリ。

五、腎尿管壓痛點ノ検査トシテ(1)肋骨脊柱點、(2)肋骨筋肉點、(3)肋骨弓下點、(4)臍側點即輸尿管上部點、(5)輸尿管中央部點、(6)膀胱腔點(婦人)又ハ膀胱直腸點(男子)即輸尿管下部點、(7)前上棘點、(8)鼠蹊點、(9)側腹部腸骨上點ヲ擧ゲタリ。

○微 毒 ト 酒

(臨狀醫學第五年第十五號)

井尻辰之助

飲酒ハ時ニ微毒ノ經過ニ異常ナル惡影響ヲ及ボシ惡性微毒或ハ微毒性惡疫質ヲ誘致スルコトアリ。

二、熱發全身性營養障礙ナドノ全身症狀アルコト。三、混合傳染ニ因ラズシテ發疹形態ニ化膿性ノ特徴ヲ示スコト等ニシテ微毒性惡疫質トハ主ニ毒素ニ因ル營養障礙ニテ驅微療法ヲナシ微毒症狀ハ減退スルモノ不幸ノ轉歸ヲト

ルコト多ク悪性微毒及微毒性惡疫質成立ノ原因トシテ注目セラルルモノハ。一、異人種ヨリ感染スルモノ。二、他ニ重症ナル疾患ヲ有スルコト。三、感染後ニ不攝生ナル生活法ヲ營ムコトトス。

尙ホ自家實驗症例ヲ擧ゲ結論トシテ酒客ハ微毒感染ニヨリテ屢々悪性微毒ヲ得、大酒家ハ往々ニシテ微毒性惡疫質ニナルコトアリ又「クロロフォルム」、「エーテル」及ビ分娩モ亦時ニ之ニ類スル現象ヲ起スコトアリ。

(以上三件、皮膚科教室森田抄)

○膀胱結核ノ療法ニ就キテノ管見

(實驗醫報第四年第三十五號)

高橋 明

著者ハ結核性膀胱炎患者三七例ニ於テ九一・九%ハ腎臟結核ヲ合併シ居タルコトヲ臨床上證明シ京都醫科大學ノ内村盛太郎氏ノ病理解剖的統計ニ略々一致スルヲ認め其根本治療ハ結核腎ノ除去ニアリトナシ其結核腎ノ診斷法トシテ腎臟觸診、輸尿管觸診及ビ「クロモチストスコピ」ノ三法ヲ述ベ其治療法ヲ攝生療法、内服法藥物的局處療法外科的局處療法ニ四分シテ詳述シ特ニ近來重視セラレタルガストン、フェルナリエ氏ガ創始セル沃度瓦斯療法ノ臭氣ノ猛烈ナル一大缺點アルニ比シロブジング氏ノ

創始セル石炭酸療法ヲ更ラニ改良セルカスベル氏法ヲ推賞セリ即チ二三例ノ膀胱結核患者(内八例ハ原病竈タル腎臟摘出後ノ患者)ニ一%ノ石炭酸液一〇〇立方仙米ヲウルツマン氏點滴器ニテ空虚ナル膀胱内ニ注入(毎日又ハ隔日一回)スルコトニヨリ尿意促迫疼痛等ヲ減ゼシメ血尿ヲ止メ良果ヲ得タリ然シテ未ダ石炭酸中毒ヲ起シタルヲ見ズ此レニヨリ著者ハ膀胱結核ノ藥物的局處療法中最モ簡單且ツ奏効確實ニシテ實地醫家ノ試用ニ適スルモノハ石炭酸療法ナリト推奨セリ。然シテ藥物注入ニ「注射器具ト成ルベク膀胱内ニ挿入セザルコト」「膀胱ヲ擴張セシメザルコト」「注入ノ際注入ニヨリ疼痛ヲ起スコトナキ様行フコト」ノ三條件ヲ注意セリ本三條件ニ適スルモノトシテ第一ニギヨン氏點滴器ヲ推シ止ムヲ得ザル時金屬製器具(ウルツマン氏點滴器等)ヲ用ヒ石炭酸溶液ハ〇・五%乃至一〇%ヨリ始メ漸次濃度ヲ増シ二〇%乃至五〇%ニ達スルヲ可トシ必ズシモ濃度高キヲ欲セズ要ハ苦痛ヲ減ゼシムルニアリト。

尙ホ手術的療法トシテ「膀胱截開術」「膀胱截開術兼搔爬術」「兩側腎臟瘻設形術兼兩側輸尿管結紮」ノ三方ヲ記述セリ。

○泌尿科ニ於ケル「デアテルミー」ノ
實驗報告

(醫理學療法雜誌第六號)

塚原 喜郎

著者ハ順天堂醫院泌尿科ニ於テ「デアテルミー」ヲ應用セル實驗例一六五ニ就キ左ノ如キ結果ヲ得タリ、勿論疾病ニ對シテハ對症の藥物の療法ヲモ併用シタルモ單ニ「デアテルミー」ノミヲ應用シタル例モアリ。

一、副峯丸疾病殊ニ淋菌性副峯丸炎ニ對シテハ其効力顯著ニシテ疼痛ハ多クハ二三回ノ操作ニテ消散シ腫脹モ十回内外ニテ縮少シ少數ハ二十回以上ヲ要シ二三例ニ却テ増惡ノ傾向ヲ來セルモノアリ又臨床上結核性副峯丸炎ト診斷セルモノニハ無効ナリキ。

二、淋菌性攝護腺炎ニ對シテハ導子ヲ「アルツベルグ肛門冷湯器型」トナシ直腸ヨリ直接ニ攝護腺ニ應用シタルニ疼痛過敏ハ數回ニテ緩解シ尙ホ反覆應用シテ腫脹硬結ノ吸収サルルヲ認メ其効價稍々見ルベキモノアルヲ知ル。

三、淋菌性關節炎及ビ「ロイマチス」性關節炎ニ於テ其疼痛腫脹ヲ緩解スル點ニ於テハ「デアテルミー」獨特ノ領域ニテ其強直ヲ殘セルモノニ對シテモ良好ナルモノノ

如シ。

四、筋肉關節其他ノ「ロイマチス」性疾患並ニ疼痛ニ對シテハ奏効常ニ確實ナリ。

五、膀胱加答兒ノ下腹部不快感尿意頻數ニ對シテハ奏効セシガ其病理解剖的變化ニ對シテハ成績不明ナリ一例ノ膀胱痙攣ニヨル尿意頻數ニ對シテハ奏効セザリキ結核性、膀胱炎ノ尿意頻數ヲ有スル一例ニ於テ比較的良好ノ成績ヲ見タリト。

六、陰萎、遺精ニ對シテ導子ヲ攝護腺炎ニ於ケルガ如ク直腸ヨリ使用シ同時ニ「フラチザチオン」ヲ併用セルニ數例ハ確實ニ奏効セリ。

七、神經痛殊ニ比較的急性ニ來リタル神經痛ニハ奏効最モ著明ナリキ。

八、股腺炎鼠蹊腺炎ノ未ダ化膿セザルモノニ應用シ良好ノ結果ヲ見タリ。

以上本器ヲ應用シタル疾病ハ殆ド亞急性及ビ慢性ノ時期ニテ僅少ノモノノミハ比較的早期ニ應用シタリ然シテ本器ハ其本來ノ性質タル鎮痛及ビ吸収作用ヲ應用スルニ適應セル關節炎「ロイマチス」性疾患神經痛等ニ對シ相當ノ効アルヲ認メタリ主ニ副峯丸攝護腺ノ淋菌性疾患ニ對シ鎮痛吸収ノ効アルハ勿論ナルモ從來ノ熱氣療法或ハ「ア

ルツベルヒ」肛門冷湯器ニ温湯ヲ通ジ加温スル方法ハ往々温度ヲ一定度ニ保ツコト困難ナルニ反シ本器ハ本來ノ性質ヲ應用スル他ニ温度ヲ一定シテ保チ快感ヲ與フルコト前者ニ優ル所アラシカ。

尿道淋ニ對シテモ理論上理想的方法ナルモ適應セル導子無ク且ツ報告ニ價スル多數ノ應用例ヲ有セズ。

(以上二件、皮膚科教室田中抄)

眼科及婦人科學

○球外視神經炎ト中心性網膜炎トノ暗點及應調障礙ノ相違ニ就テ

(中央眼科醫報第九卷十一號)

石 津 寬

著者ハ大正五年十二月ヨリ陸軍々醫學校、東京第一衛戍病院及ビ臨時脚氣病調査會ノ患者中ヨリ、球外視神經炎六十一例百廿一眼、中心性網膜炎廿一例廿八眼ニ就テ、暗點及應調障礙ヲ研究調査シ左ノ結論ヲ得タリ。

一、我國ニ於ケル球外視神經炎ノ多數(九一・八%)ハ横卵圓形又ハ其變形ナル杓子形「ラケット」形中心暗點ヲ呈ス。此種ノ暗點ハ西洋ニテハ「アルコール」、煙草ノ中毒性弱視ニ見ル形ニシテ我國ニテハ主トシテ脚氣ニ

原因スル者ノ如シ、脚氣四百廿三名中十八名、即チ四三%ニシテ此種ノ球外視神經炎ハ西洋ニ少ク我國ニハ甚ダ多キ所以ナリ。

二、脚氣ニ因スル中心暗點ノ特徵ハ左ノ如シ。

(1)暗點ハ横卵圓形ニシテ廣キ基底ヲ注視點ニ狹キ端ヲ盲點ニ置ケルガ如ク位置ス(定型の形態)症狀輕快スレバ暗點ノ周圍ヨリ漸次其領域ヲ狹メ横梨菓形、「ラケット」形、又ハ杓子形トナリ更ニ輕快スレバ注視部ニ孤島狀小暗點ヲ貽シ終ニ消失ス症狀増悪スレバ横卵圓形暗點ノ穿破ヲ來ス、穿破ハ通常暗點ノ上方ニ於テシ綠赤、色ノ周邊無色界ト相融合ス。(2)暗點ハマリオット氏盲點ト連絡アリ。唯症狀輕快シテ注視部ニ孤島狀小暗點ヲ貽ストキハ之レガ連絡ヲ失フ。(3)暗點内濃度配分ニ一定ノ規約アリテ最モ濃キハ注視部ヲ含ミテ之レヨリ外方五〇六度ニ互レル核點、之ニ次グハ核點ト盲點トヲ連絡セル橋狀帶、最モ淡キハ前二者ノ周圍ヲ取卷ケル暗點ノ殘部ニシテ外圍ニ至ルニ從ヒ徐々トシテ淡ク終ニ健康視野ニ移行ス。(4)暗點ヲ生ズル色ハ綠、赤、ニ最モ著明ナリ。(5)暗點ハ虛性ナリ。(6)暗點ノ周圍ハ概ネ圓滑ナリ。(7)通常兩眼ニ來ル。

三、球外視神經炎ト中心性網膜炎トノ暗點ノ相違ハ如左。

一般ニ強ク障碍セラル。

(眼科學教室加藤抄)

○「ルテイン」囊腫ニ就テ

(日本婦人科學會雜誌第十二卷第十一號)

折 田 穎

(1) 球外視神經炎ノ暗點ノ大部分(九一・八%)ハ横卵圓形中心暗點ニシテ他ノ小數(八・二%)ハ之ト似テ非ナルカ或ハ全ク形態及濃度配分ノ狀況ヲ異ニス、中心性網膜ニテハ形、大サ、位置、濃度配分ノ狀況ニ一定ノ規約ナク多種多樣ナリ。(2) 暗點ヲ生ズル色ハ球外視神經炎ハ綠、赤、著明ニシテ中心性網膜炎ハ青、黃、ヲ侵スコト最モ強シ。(3) 暗點ノ本態ハ球外視神經炎ニテハ虛性、中心性網膜炎ハ初期實性、癍痕形成スルニ及ビ虛性トナル。(4) 球外視神經炎ノ多數ハ兩眼ニ來リ中心性網膜炎ハ兩眼同時ニ侵サルコト少ク若干ノ時日ヲ置キテ一眼ヨリ他眼ヲ侵シ又屢々終止一眼ニ止マル。(5) 球外視神經炎ノ暗點ノ邊緣ハ概ネ圓滑ニシテ中心性網膜炎ハ不正ナルコト多シ。

四、球外視神經炎ト中心性網膜炎トノ應調ノ相違ハ如左。

(1) 球外視神經炎ハ明應調障碍ヲ來シ、中心性網膜炎ハ暗應調障碍ヲ來ス、前者ハ晝盲現象トシテ後者ハ夜盲現象トシテ顯ハル。(2) 球外視神經炎ノ暗點領内ニハ暗應調障碍ヲ認メ難シ、又暗所暗點ノ大サ、形、濃度配分ノ狀況等總テ明所暗點ト同ジ。中心性網膜炎ノ暗點ハ暗所ニ於テハ局所性暗點應調障碍ノタメ明所暗點ヨリモ擴大シ、且ツ暗點内ノ光神ハ球外視神經炎ヨリモ

著者ハ五例三十個ノ囊腫ヲ有スル十個ノ卵巢ニ就テ次ノ結論ヲ得タリ。

一、「ルテイン」囊腫ハ真正腫瘍ニアラズシテ寧ローノ溜囊腫トナスベシ。

二、出血及實質細胞ノ軟化及浮腫ニヨリ生ジ黃體及閉鎖濾胞ヨリ發生シ白體及纖維體ヨリハ發生セズ。

三、單獨或ハ多數同一卵巢ニ存シ多クハ兩側同時ニ存在ス。

四、囊ノ大小ハ不同、壁ハ一般ニ菲薄ナリ肉眼のニ明カニ構造ヲ示スハ少ク厚キ壁ニ於テ二層又ハ三層ニ區別シ得。

五、内容物ハ新鮮ナル狀態ニ於テハ漿液性透明帶黃色ナルモ固定後ハ膠狀半透明灰白色ヲ呈ス。

六、囊壁ノ組織的構造ハ多樣ニテ同一部位ニテモ切片ニヨリ異ル構造ヲ有スルコトアリ。

七、囊壁ノ構造複雜ナルモ大別スレバエル、フレンケル

ノ第一第二第三及ビ「ルテイン」細胞ヲ缺クモノノ四型ニ出デズ。

八、囊内壁ハ鏡見上ニハ波狀ヲ呈ス。

九、本囊腫ハ血行障得ニ因スルモノナレバ血行障得去ルニ從テ縮少シ遂ニ消滅スベキナリ之レ臨床上留意スベキ所ニシテ若シ葡萄狀鬼胎分娩後多發性卵巢囊腫存スルモ他ニ手術ヲ要スベキ疾患ナキ限りハ非手術的ノ態度ヲ持シ其經過ヲ注意スベキナリ。

○胎兒骨盤ノ化骨核

(日本婦人科學會雜誌第十二卷第十一號)

醫學博士 小畑 惟 清

著者ハスバルテホルツ氏透明的標本製作法ニヨリテ身長四・五仙迷ノ胎兒ヨリ初生兒ニ至ル四十五體ノ骨盤、及ビ三・五密迷ヨリ九仙迷迄ノ身長ヲ有スル四十九例ノ胎兒ノ顯微鏡的連續標本ヲ研究シ顯微鏡的標本ニ現ハルル微少ナル石灰沈着部ノ大サ形狀ハ透明標本ニ現ハルルモノト全ク等シキヲ知レリ、而シテ著者ハ顯微鏡的標本ニヨリテ化骨初期ノ狀態ヲ概説シ、次デ透明標本ニヨリテ化骨核ヲ説キ以上ノ所見ヨリ兩標本ニ共通ナル點ヲ擧ゲテ次ノ如ク結論セリ。

一、子宮内生活中骨盤ニ出現スル化骨核ハ左右對象的ニ出現スルハ腸骨坐骨恥骨第一乃至第五薦骨弓部第一乃至第二薦骨側部ナリ正中線ニハ第一乃至第五薦骨體部ニ單獨ニ現ハル。

二、總テノ化骨核ハ單獨成立ニシテ二箇以上ヨリ合成スルコトナシ。

三、尾骶骨及薦骨側部ヲ除キ他ノ化骨核ハ身長三五仙迷ノ胎兒ニテ全部之ヲ認ムルニ至ル。

四、初生兒ニ於テモ化骨核ハ軟骨ヲ以テ相互ノ間ヲ隔ツ又坐骨結節及ビ坐骨棘ノ部ハ軟骨殊ニ多量ナリ。

五、化骨前反應及化骨核ノ發育狀態ハ胎兒ノ性別ニ關係スルコトナシ。(以上二件、婦人科學教室齊藤抄)

會 報

●雜誌部記事

本年六月當十全會雜誌部は、聊か獎學の目的を以て、將に來らんとして、あつた夏季休暇を利用して、左の規定を定めて、廣く醫學に關する論文を募集した。

先月漸くその事を終へたので、こゝに其結果を報告すべし。

規 定

一、論文題——廣く醫學に關するもの。

一、用語——邦語又は獨逸語たる事。

一、應募者——本校學生たる事。

一、審査——各教授に依頼する筈。

一、入賞——約五篇、該論文に對し當部「メダル」一個宛を贈呈し、且

入賞論文は本誌上に掲載する筈。

一、メ 切——九月三十日迄に金澤病院小兒科醫局宛又は雜誌部委員宛

提出されたし。

夏季休暇を利用して、三伏の苦熱も厭はず、熱心なる勉學と研究とを續けられ、規定に従ひて論文を提出せられしもの十一人にして、その論文合計八篇であつた。

そこで當雜誌部はその論文を受納し、直ちに委員會を開き、その決する所に従ひて、その論文を、その論文の屬する科に分けて、それら各料の先生に御願して審査を乞ふ次第である。

而して當部は各先生の御審査下さつた結果、當十全會雜誌に掲載の資格あるものと認められし、六篇を以て入賞と定め聊かながら當部「メダル」一個宛を贈呈し、且その入賞論文は月を逐ふて當十全會誌上に掲載する筈である。

入賞者の論文題及びその氏名は左の如くである。

一、縫針嚙下ノ病例 第四學年 上 出 成 之君

二、原發性肺放線狀菌病ノ一例 全 伊 達 文 次君

三、金澤市ニ於ケル痰壺内喀痰ノ結核菌検査ニ就テ

第四學年 島 山 正君

全 笹 川 竹 藏君

全 的 場 清 太 郎 君

四、「スヒロヘーテ」病ノ病原及病理解剖ニ關スル

近業纂說(獨文)

第四學年 山 崎 和 雄君

第三學年 中 川 正 儀君

五、我國ニ於ケル比較及實驗病理學的腫瘍研究ノ概況

第三學年 辻 出 小 在 門君

六、恙虫(毛蟲)病ニ關スル現今ノ智識

第三學年 中 澤 弘 恭君

終りに臨みて特筆したきは諸先生が當雜誌部の企に御賛同下され、且又御多忙中にも拘らず、御審査の勞まで御とり下さつた事で、當部はこゝに厚く御禮を申し上げる次第である。

●第十八回講話部大會

十一月七日午前九時十分開會左記の講演ありたり。

一、開會之辭 須 藤 部 長

二、奮激性 藥 一 上 野 善 作君

三、神ノ使命ヲ帶ビテ 醫 一 高 島 高 之君

四、幻滅ノ悲哀 藥 一 増 谷 讓君

五、祖國ヲ愛セヨ 醫 一 市 田 賢 吉君

六、吾輩ノ人生觀 醫 一 金 森 精 一君

七、豐太閤 醫 一 武 居 市 重君

八、日露獨同盟案 醫 一 田 中 靜 雄君

九、「エネルギー」ヨリ見タル生活現象 醫 三 中 谷 正 知君

十、現代青年第一人 醫 三 和 田 龜 俊君

十一、金澤地方ニ於ケル「トラホーム」ノ統計的觀察

十二、小兒口蓋扁桃腺肥大症ト各學科トノ關係
醫四 上 出 成 之 君

十三、金澤市ニ於ケル痰壺内喀痰検査成績
醫四 中 島 銳 雄 君

十四、金澤市肺結核蔓延狀態
醫四 島 山 正 君

十五、人生ト不調和
醫四 笹 川 竹 藏 君

十六、肥厚性鼻炎氣道疾患
特別會員 越 村 甚 次 郎 君

十七、慢性腹膜炎治療趨勢
全 佐 々 木 茂 雄 君

十八、精神療法ニ就テ
全 中 島 誠 君

十九、猫咬症
田 中 講 師

二十、臟器内血行調節機轉ニ就テ
山 本 講 師

廿一、在京所感
宮 田 教 授

廿二、閉會之辭
須 藤 部 長

外に林雜誌部長の雜誌部懸賞論文當選發表ありたり。
須藤部長の簡單なる閉會の辭と共に會場森として會は嚴に始まつた。連に
して拍手の響堂に充ち連にして靜寂、之を近來吾國辯論界に漲つてゐる紊
亂狀態即聽衆類に辯士に嘲罵の聲を浴せ辯士又之に答て云々するに比べて
誠に愉快に耐へない次第である、之は須藤部長就任以來大に之が改革の
必要を唱へられたと同時に部員の努力にもよるものであるが又一に近來著
しく本校學生氣風の改まりしを意味するものではあるまいか。
閉會午後五時會後出演辯士慰勞茶話會を催す猶當日委員選衡の上優秀辯士
左記三氏に講話部「メタル」贈呈に決す。

會 報

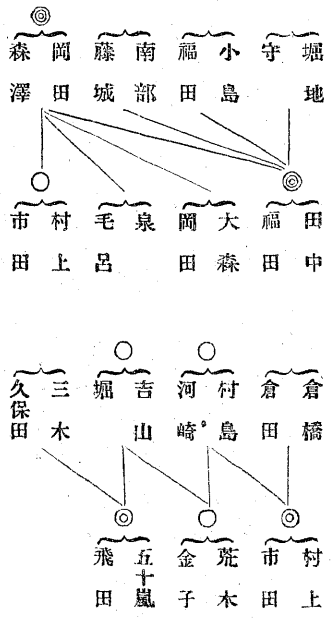
醫一 市 田 君 全 金 森 君 醫四 上 出 君
但出演辯士中委員除外。
(委員伊藤記)

●第十二回庭球大會

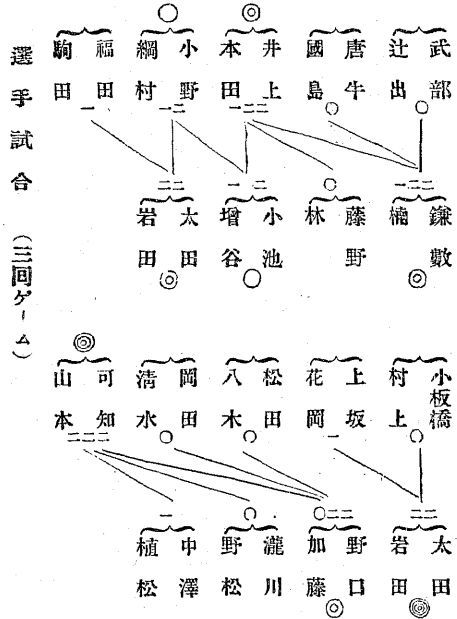
土曜日、日曜日をを選んで行はれた各種の屋外運動の大會はほんご延期な
して満足に終つた。このなかつた今秋の運動界に於て我が醫專の庭球部が
盛會の中に豫定通りに行ひ得た。これは先づ天に向つて感謝すべきである。
更に吾人が校内試合に於て本校多年の積弊を破つて、時間勵行の新例を開
き得たことは衷心愉快を禁じ得ぬ所である、且つ又日曜日の對外試合の成
績の如き戦はざるにすでに期待する所なりしは云へ又以つて本校庭球部
の名譽を傷つけざりしものとして在校五百の學友はもとより卒業生諸氏に
報告するを喜ぶものである。
猶來賓として高安會長、土肥部長、中村、田村、村田各教授、山本、富田
諸講師、石川委員長を始め各醫員諸氏の御出席に對し滿腔の敬意を傾けて
感謝し奉るものである。
左に當日の戦績を記して紀念とす。

校 内 試 合 十月二十日午後一時開始

一回ゲーム 紅白勝負

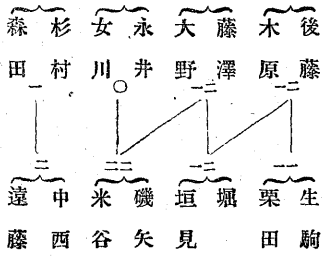


三回ゲーム 紅白試合



選手試合 (三回ゲーム)

時間勵行の結果毎年番組には戦れざる省略さるゝが常なりし選手試合をさへ行ふを得。しかも一、三年對二、四年としたればこそさら試合に油がのりて快よき戦を見たるは、うれしかりき。(上一、三年、下二、四年)



對外試合 十月二十一日午前十時開始

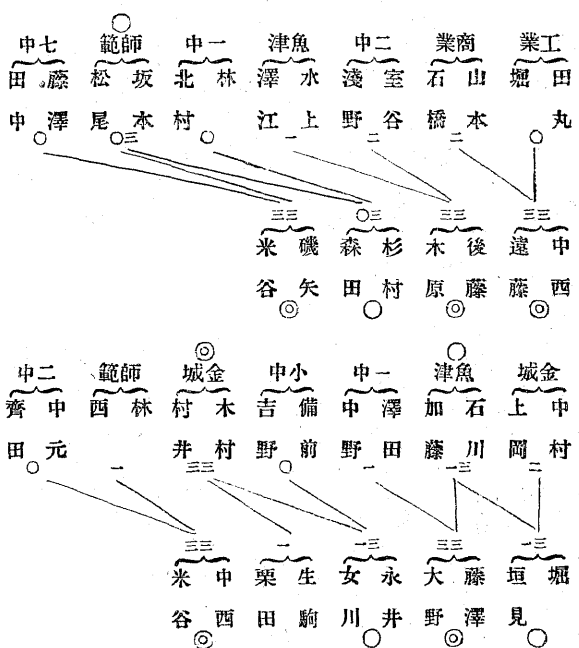
(五回ゲーム)

來賓校

本校

來賓校

本校



最後に來賓試合を行ふ。

越村先生 橋先生

石川先生 山本先生

庭球部の紀念撮影萬歳を三唱して會終る。

●劍道部南下隊

我部の隆盛なる寂寞たる往日の比に非ず、茲に於て瀛に京都帝國大學主催全國各専門學校劍道部優勝試合に参加せむ事を企圖したる我部選手は日々猛烈なる稽古を重ね陣容整ひたれば近く南下し洛陽の地に於て戦を交へむとす。幸に諸君、此舉を壯なりとし選手の意氣を盛なりとし大いに應援あ

らむ事を。

南下選手左の如し。

| | | |
|-------|-------|--------|
| 齊藤 靖 | 今田 俊英 | 清水 友次郎 |
| 宮崎 宗一 | 大橋 四郎 | 松永 傳事 |
| 渡邊 初男 | 瀧川 一忠 | 國島 政治 |
| 村上 賢三 | 村田 三郎 | 生垣 省三 |
| 畑 久 | | |

選手監督

今田 俊英

附加。優勝試合は十二月二十八日より三十日迄三日間京都帝大道場にて開かる。

叙任及辭令

●内閣

(十月二十日)

金澤醫學專門學校教授正六位 加藤 靜雄
任長崎醫學專門學校教授

叙高等官四等

●宮内省

(十月二十日)

叙正五位 從五位勳五等 宮田 篤郎

(十月三十日)

叙從七位 村田 金太郎

●東北帝國大學

叙任及辭令 人 事

(十一月九日)

東北帝國大學醫科大學助教授 敷波 重治郎
福島、山形ノ二縣下へ出張ヲ命ス

●石川縣

(十一月八日)

金澤病院調劑部長 加藤 靜雄
願ニヨリ囑託ヲ解ク

(十一月一日)

大正六年秋季產婆試驗委員ヲ命ス

金澤病院醫員 内田 豐 咲

(十一月八日)

大正六年秋季看護婦試驗委員ヲ命ス

金澤病院醫員 太田 尙 男

人 事

●鈴木、島田兩博士

海軍々醫大監鈴木寛之助及新潟醫學專門學校解剖學教授島田吉三郎の兩氏は共に明治廿九年本校出身の秀才にして今年鈴木氏は首席、島田氏は次席を以て卒業し爾來研鑽を積まるゝ事多年、今や兩氏共に斯界の權威として命名あるに周知の事實なりしが果せる哉曩きに提出せられたる論文審査の結果今回全時に醫學博士の榮冠を得られたるは誠に慶賀の至り此れ獨り兩博士の名譽に止まらず延て我母校の榮譽にして復た國家の爲め大に實すべき事たり茲に吾等同人謹んで兩博士の爲めに滿腔の祝意を表す。因に兩博

士の略歴左の如し。

鈴木博士ハ明治八年生、長野縣ノ人、明治二十九年十一月第四高等學校醫學部卒業、全年石川縣金澤病院醫員拜命、全三十年五月依願解職、明治三十年五月海軍へ出身海軍少軍醫候補生ヲ命セテ、累進シテ大正五年四月一日海軍々醫大監ニ任セラレ現在海軍々醫學校教官、從五位勳四等ニシテ東京市施療病院外科醫長ヲ兼ヌ。明治四十二年軍艦宗谷軍醫長トシテ北米西岸及布哇巡航、明治四十四年英國皇帝「ジョージ」第五世陛下戴冠式舉行ニ就キ派遣ノ第二艦隊旗艦戰馬軍醫長ヲ以テ英國へ渡航、其際英國沿岸巡航及佛、伊、澳諸國歴訪、巴里、伯林、ドレーステン、トリノ、羅馬、維納等へ見學旅行、大正元年十二月外科學研究ノ爲メ獨國駐在ヲ命セラレ大正二年三月伯林大學ニ入學、一學期間「シヤリター」第一外科「クリニツク」(教授ヒルテブランド)ニ於テ一般外科ヲ學ヒ又兼テハルト教授ノ病理教室ニ於テ病理學研修、次テ、實驗的腫瘍學、腫瘍組織的診斷、一般外科組織的診斷等實習、大正二年十一月ヨリ三年八月迄伯林市立「ウルパン、グランケンハウス」病理教室ニ於テ教室主任コツホ氏指導ノ下ニ外科病理ニ關スル作業ニ從事シ兼テ全院外科部長プロフエツソル、キヨルテ氏ノ手術室ニ於テ主トシテ腹部外科研修、大正三年五月伯林ニ於テ開催ノ國際癌研究會委員會ニ日本癌研究會正會員代表者トシテ出席ス、大正三年八月十五日戰亂ノ爲メ伯林退去、全月十九日倫敦着、次テ全月二十九日獨國駐在ヲ免セラレ更ニ英國駐在ヲ命セラレ引續キ外科學研究ヲ命セラル、大正三年九月ヨリ全四年三月迄、倫敦大學、倫敦病院、醫學校病理教室ニ於テ外科病理ニ關スル作業ニ從事シ又兼テ全校シエン教授ノ手術室ニ於テ腹部外科研修、又全院ニ收容シタル英、白蘭國ノ負傷兵ノ治療ヲ補助シ且時々英國海軍病院船、傷病兵輸送列車、「チャタム」海軍病院等ヲ見學ス、大正四年三月歸朝被仰付、全月下旬米國ヲ經由シ東京米譜大學、病院ヲ見學旅

行シ全年五月下旬歸朝、而シテ氏ハ明治四十五年佛國政府ヨリ贈與ノ「カフヒシエー、ド、ロルドル、ナシヨナル、ド、ラ、レンジオンドノール」勳章ヲ受領シ及佩用スルヲ允許セラル。

島田博士ハ明治九年生、富山縣ノ人、明治廿九年十一月第四高等學校醫學部卒業、全三十年七月永樂病院醫員ヲ命セラレ、全三十六年七月金澤市私立金城療病院部長トナリ明治三十九年九月本校講師ヲ囑託セラレ、全四十四年五月京都醫科大學解剖學助手ニ任命セラレ鈴木博士ノ下ニ研究、明治四十三年九月新潟醫學專門學校教授ニ任セラレ、大正二年十月解剖學研究ノタメ獨乙國へ滿二ケ年間留學ヲ命セラレ全三年二月着獨民顯醫科大學教授モツリア氏ニ就キ研究中ノ處、日獨開戰ノタメ全年八月退獨、全十月歸朝シ、全四年一月ヨリ留學殘期間京都醫科大學解剖學教室ニ於テ再ビ鈴木教授ノ下ニ研修セラレ大正五年九月ヨリ歸校、現ニ新潟醫學專門學校解剖學主任教授タリ。

會 告

自大正六年九月廿六日校外特別會員會費納付調書
至全 十月廿六日

| 金 額 | 期 限 | 氏 名 |
|---------|-------------------|----------|
| 一金五圓也 | 自大正六年度 至大正七年度分 | 石 黒 四 郎殿 |
| 一金貳圓五拾錢 | 大正六年度分 | 窪 田 他 作殿 |
| 一金貳圓五拾錢 | 全 | 尾 倉 一 英殿 |
| 一金貳圓五拾錢 | 全 | 草 川 正 也殿 |